
4人の勇者と異世界物語

鮮血ニ笑ウ死神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

4人の勇者と異世界物語

【Nコード】

N5708K

【作者名】

鮮血二笑ウ死神

【あらすじ】

『遊ばないか?』と友達からメールが来て、俺は友達の家に向かった…

この時の俺はまだ自分の身に…いや、自分達の身に起こる出来事を知る由もなかった…

まさか…

こんな事が起こるだなんて…

そして物語の始まりへ（前書き）

作者 「どうも、後先考えずもう一つ小説を書いてしまった馬鹿作者です」ですが馬鹿は馬鹿なりに頑張って行くのでよろしくお願いします」それでは本編をどうぞ」

そして物語の始まりへ

神様 「行き成りの事で驚くかもしれないが俺はお前達の世界で言う所の神様だ」

目の前に行き成り現れた自分を神様だと言う男を俺達は理解ができないと言った風にただ呆然と見ていた。ほうぜん

何故こんな事になっているのだろう？

俺は男が現れるちよつと前の事を思い返してみた。

回想

ブー、ブー、ブー

一定のリズムで鳴り響くバイブ音を鳴らすケータイを俺はベットから手を伸ばし取った。

中を見るとメールが一件きていて開いて見ると…

『オース優魔』

早速だけど今日遊ぼうぜ！

因みにお前の意見は完全無視だからよろしく
『』

つと書いてあった。

優魔 「うぜえ……」

俺は一言そう呟いてベットから出て着替えた。

優魔 「……………（まあ、どうせ暇だしな）」

親 「何処かいくの？」

優魔 「彰あきひの家に行ってくる」

支度を済ました俺が玄関に向かうと親にそう聞かれたので彰の家に行く事を伝えて家を出た。

彰 「遅いぞ優魔」

彰の家に着いた俺はインターホンを押すと中から小柄な少年が出て来た。

こいつの名前は清水 彰しみずあきひで

俺の友達だ。……………一応

身体的特徴は身長が低いし身体が細い、髪型はやや短めで何故だか女子共に持てると言う事だが……………何故？

取り敢えずそこは置いて俺は中に入った。

桜 「おはよう優魔」

隼人 「オース」

リビングに出ると友達2人に挨拶されたので俺も挨拶をしてソファ
ーに座った。

一番最初に挨拶して来たのは彰の双子の姉の清水

桜しみずと言う女子で

身体的特徴は肩まで掛かる黒髪に少し低めの身長で

もう一人は小川 隼人おがわはやくと言う男子で、身体的特徴は高めの身長に整

った顔立ちをしていて、俺と比べると天地の差だ。

因みに俺の名前は月宮 優魔つきみやゆづまと言う名前で身体的特徴は彰程ではな
いけど少し低めで顔もそれ程良いと言う訳ではない。

彰 「よし、取り敢えずゲームでもするか」

彰はそう言い出してゲーム機を出した。

ゲームを始めて数時間…

優魔&隼人

「「また負けた!?!」」

彰 「お前達じゃ何回やつても勝てないよ」

桜 「少し手加減したら?」

大乱闘と言う対戦ゲームをそこそこ楽しんでいると隼人が立ち上が
った。

隼人 「わりい彰、何か飲み物くれないか？」

彰 「冷蔵庫の中にペットボトルが入ってると思うからそれを持ってきて皆で飲もうぜ」

隼人 「優魔、コップを持ってくの手伝ってくれ」

優魔 「OK」

俺は短くそう言ってソファから立ち上がった瞬間、それは行き成り訪れた…

桜 「何！？」

彰 「なっ！？」

隼人 「何だよこれ！？」

優魔 「つつ！」

周りの景色が灰色一色に染まったかと思うと行き成り周りの景色がガラスの様に碎け散り、何も無い白い空間にいつの間にか俺達はいた。

神様 「行き成りの事で驚くかもしれないが俺はお前達の世界で言う所の神様だ」

回想終了

優魔 「（何だ…？、一体何が起きた…？、此处は何処だ？何故俺

達は此処にいる？この何も無い空間は一体何だ？自分の事を神と名乗ったあいつは何だ？」

俺は何が起こっているのか理解できなかった…

いや…、俺だけじゃない…

周りを見れば彰達も何が起こったのか解らないと言った表情をしている。

つとその時、桜が口を開いた。

桜 「貴方は自分の事を神と名乗りましたが…、此処は何処ですか？」

やや裏返っているが桜は冷静に静かにそう言った。

神様 「行き成りで本当に済まない、此処は俺が瞬間的に創り出した空間だ、お前達を此処へ運んだのはお前達人間に頼みたい事があるからだ」

桜 「頼みたい事ですか？」

桜は訝し気に聞いた。

それはそうだろ、仮にも神と名乗る者がどうして何の力も持たない俺達に頼み事などする？

神ならばどんな事でも出来るだろう？

神 「神だつて何でも出来ると言う訳じゃない」

神と名乗る男はまるで俺達の心の中を読んだかの様に喋りだした。

神 「俺達、神は他の世界には干渉できないんだ、今此処ではない別の世界が滅びへと向かおうとしているだからお前達にその世界を救って欲しい！」

神はそう言つて俺達に頭を下げた。

彰 「ちょ！？ちよつと待つて！」

すると彰が大きな声を上げた。

彰 「世界を救ってくれつて何だよそれ！？悪いけど何の力を持たない俺達には何もできない！」

優魔 「落ち着けよ彰」

声を荒げる彰に俺はそう言うが彰の気持ちも解らない訳じゃない。行き成り訳の解らない所に連れて来られて世界を救ってくれと言われれば誰だつてパニックだろう。

彰 「落ち着けて…、落ち着ける訳ないだろ！行き成りこんな所に連れて来られて世界を救ってくれつて何だよそれ！ふざけるなよ！」

案の定彰は声を荒げる事をやめなかった。俺は仕方がないと言つた風に溜め息を吐き、彰の頬に平手打ちをくれました。

パーン！

彰 「……………え？」

優魔 「いいから落ち着け」

俺はそう言って神の方を向いた。

優魔 「お前に幾つか確認したい事がある」

神様 「神に向かってお前か…、いいだろう言ってみろ」

神は特に気にした風もなく話を促した。

優魔 「この何も無い真っ白い空間はお前が創った空間で俺達はお前の力で此処に飛ばされた、これで間違いないな？」

神様 「ああ」

俺が聞くと神は短く返答した。

優魔 「お前は先程、俺達神は、とそう言った、ならば他にも神がいるんだな？」

神様 「ああいる、この世界以外にも他の世界は存在する、その世界の一つ一つに俺の様な神と呼ばれる者達が一人ずつ自分がいるその世界を管理している」

優魔 「それならその世界を管理している神ならば滅びに向かう世界を救えるんじゃないのか？」

俺がそう言つと神は拳を握り締めて悔しそうに口を開いた。

神様 「世界の滅びを感じ取った俺は急いでその世界を管理してる神に連絡を試みた、だがどう言う訳か連絡が繋がらないんだ」

神はそう言っただけで俯いてしまった。

優魔 「何故俺達に世界を救えと頼むんだ？俺達は何の力も持たない人間だ」

俺は神に質問を続けた。

神様 「お前達は気付いていないかもしれないが、お前達には膨大な力が眠っている、その力があれば滅びに向かう世界を救えるかもしれないんだ」

優魔一同 「「「！？」」「」「」

神の予想だにしない言葉に俺達は息を呑んだ。

優魔 「その力と言うのは何だ？」

神様 「俺が知る限り、その力は魔力と呼ばれている物で魔法を發動させるのに必要な力だ」

隼人 「はははははははははは！」

神の言葉に隼人が突然に笑いだした…

……… ついに壊れたか？

隼人 「こいつはいい！さっきからずーと聞いていれば神だの世界を救えだの挙げ句の果てに魔法と来たものだ！クククッ」

隼人は狂った様に笑みを浮かべ神を見た。

隼人 「なあ神様よお！もし俺達がその世界を救わなかったら一体どうなる？」

しばらく啞然としていたが隼人に聞かれて神は我に返った。

神様 「恐らく世界は滅び、その世界にいる者達も一緒に消えるだろう」

神がそう言うとき隼人は狂った様な笑みを浮かべながら「そうか…」と短く呟いた。

彰 「……おい優魔、隼人は一体どうしたんだ？」

優魔 「俺が知るかよ…」

小声で話し掛けてきた彰に対し俺も小声で返すと隼人がこちらを向いた。

隼人 「俺は世界を救ってやってもいいと思ってる、お前達は？」

彰＆桜 「……………は？」

優魔 「……………（何を言ってるんだこの馬鹿は？）」

隼人の言葉に俺達の思考は一時止まってしまった。

隼人 「どうした皆？」

隼人は啞然としている俺達を訝し気に見てそう言った。

優魔 「本気で言ってるのか？」

俺は隼人にそう聞いた。

隼人 「当たり前だ、こんな面白そうな事しないでいられるかよ」

優魔 「命に関わる事かもしれないんだぞ？」

隼人の馬鹿みたいなその発言に俺がそう言い返すと隼人は狂った様な笑みを消して面白そうに笑って見せた、

隼人 「ハッ！命が関わる？上等じゃねえか！刺激があるから人生は楽しいんだよ！」

隼人の発言に俺と彰と桜は顔を見合わた。

桜 「……………どうする？」

優魔 「どうするって…、あの馬鹿を一人で行かせる訳にはいかないだろ？」

彰 「それに友達だしね……」

桜 「じゃあ決まりね……」

俺達は小声で話し合って隼人の方を向いた。

優魔 「3人で話し合った結果、一緒に行つてやるよ」

俺がそう言つと隼人は笑みを浮かべながら振り向いて神を見た。

隼人 「決まりだな、おい神様よお、俺達4人がその滅びに向かうつて言つ世界を救つてやるよ」

神は俺達をただ呆然と見ていたが言われた事を理解すると笑みを浮かべて「ありがとう」と言つた。

そこで彰が何かに気づいた様に口を開いた。

彰 「ちよつと待って!」

優魔 「どうした?」

彰 「異世界に行くのはいいけど、その間こつちの世界の事はどうなるの?」

優魔&隼人&桜

「「「あつ!」」」

彰の言葉に俺達は神の方を向いた。

その視線に気が付いた神は笑みを浮かべて「気にするな」と言つた。

神様 「俺は神だぞ?時間ぐらい調整してやるさ、例えどれだけ長い間向こうに行つてようがこつちでは1秒程度の出来事だ」

神の言葉に俺達は安心した様に息を吐き出した。

優魔&隼人&彰&桜

「「「よかつた」」」

神様 「それじゃあそろそろ行ってもらうが、心の準備はいいか？」

神の言葉に俺達は表情を引き締めた。

優魔 「いつでも構わない」

隼人 「俺も準備OKだ！」

彰 「こうなつたらとことんやってやる」

桜 「……………↑（一人緊張してる…）」

俺達の言葉に神は頷くと右手をこちらに向けた。

神様 「頼んだぞ、世界を救ってくれ、4人の若き勇者達よ…」

神がそう呟くと俺達を眩しい程の光が包み込んだ。

そして物語の始まりへ（後書き）

作者 「どうでしたか？ただいま二話も作成中です、気長に待って
もらって幸いです、それでは皆さんまた次回まで」

そして出会いは突然に（前書き）

作者 「自分なりには早く投稿出来た方だと思います、それでは本編をどうぞ」

そして出会いは突然に

優魔&隼人&彰&桜

「「「「は？」「」「」

俺達を包んでいた激しい光が止むのを気配で察知し閉じていた目を開くと…

優魔&隼人&彰&桜

「「「うわ（いや）あああああ！？」

俺達は空中から地上に向けて素晴らしい速度で落下していた。

彰 「何で俺達は空中にいるんだよ！？このまま落ちたら確実に死ぬぞ！？」

桜 「ちよっ！？彰！そんな事言わないでよ！」

優魔 「しかしこのまま落ちたら彰の言う通りに確実に死ぬな…、ん？」

俺はそこまで言っている事に気が付いた。

優魔 「おい彰、お前の背中に張り付いてる、それは何だ？」

彰 「え？」

俺の言葉で皆の視線が彰の背中に集中した。

彰の背中には何だか紙の様な物が張り付いていた。

隼人 「え」と何々」

隼人は彰の背中に張り付いている紙を剥がすと何か文字が書いてある様で読み始めた。

隼人 「異世界に行く餞別せんべつに俺がお前達の身体を強化しておいた、普通の人間よりは身体能力が上がって身体も多少丈夫にしておいたから頑張れよ！b y 神様」

優魔 & 彰 & 桜

「「「……………」」」

隼人が読んでいるのを黙って聞いていた俺達は神に対して怒りを覚えた。

彰 「b y 神様」って…」

桜 「完璧にふざけてるわよね…？」

隼人 「って言うか、俺達が今こうして落ちてるのって神の所為だよな？」

優魔 「世界を救ってくれって頼んで来たのに、その世界を救う俺達の命を危険に晒さらすってどう言う訳だ？」

それぞれが思っている事を口に出して見て俺達の心が今一つになった。

優魔 & 隼人 & 彰 & 桜

「『『次に会ったら力の限りぶん殴る！！！！』」」

俺達は一頻りひとしきそう叫んだ後、桜がおもむろに口を開いた。

桜 「はあゝ、所で…」

優魔 「ん？どうした桜？」

桜 「さっきの紙に身体を丈夫にしておいたって書いてあったけど、あれってこの高さから落ちてでも大丈夫なわけ？」

優魔&隼人&彰

「『『……………』」」

桜の言葉で俺達は固まってしまった…

俺は少し考えてみたがどう考えても助かる確率は低かったので彰にアイコンタクトを送り俺の視線に気付いた彰は頷いて見せた。

優魔 「（流石は彰だ…、俺が考えている事を瞬時に理解してくれた…）」

彰とは中学の頃に友達になったのだが、過去にいろいろあって、視線一つである程度はお互いの考えを読める程の域にまで達した。つとまあその話しは置いて俺と彰は落ちながらも隼人の背中に回り込み、俺は右腕を、彰は左腕に自分達の腕を絡ませてがっちりと押さえ付けた。

隼人 「ちょ！？お前ら何をするきだ！？」

彰 「桜今だ！」

桜 「OK」

優魔 「（流石は彰の姉だな…、弟の考えている事を読み取ったか…）」

最初は俺達は何をしているのか解らずにただ呆然と見ていた桜も彰に呼ばれて、俺達は何をしようとしているのか理解し笑みを浮かべて隼人の背中に回り込み、服を掴んだ。

隼人 「お前らまさか!？」

隼人も俺達は何をしようとしているのか理解した様だ。

俺達は顔を見合わせて笑みを浮かべて言った。

優魔 「やっと気付いたか、そうだお前には…」

優魔&彰&桜

「俺（私）達が助かるための生け贄になってもらう!」「」

隼人 「やっぱりか!お前ら俺を下敷きにするつもりだな!？」

俺達の考えに気付いた隼人は身体を揺らして逃げ様とするが俺達にしっかりと両腕やら服を掴まれているため逃げる事はできないでいた。

隼人 「くそつたれ!お前ら離しやがれ!」

優魔&彰

「断る!」「」

桜 「見て！町が見えてきたわ！」

桜の言葉で隼人を押さえ付けていた俺と彰は下を向いた。

優魔 「あれは…、城か？」

彰 「まずい！このまま落ちたらぶつかる！」

俺達は真っ直ぐと城に向けて落ちていた。

桜 「どうするのよ!？」

優魔 「どうするって言ったって…」

彰 「駄目だ！もうぶつかるぞ！」

そして…

ズドオオオオオオン!!!!

俺達は城に落ちた。

此処はフォルスネイン王国、フォルスネイン城。

今お父様が王国の周りに魔物が大量発生していると言う報告を受けて難しい顔をしている所です。

因みにお父様と言うのはこの国の王様で名前は…

グラン・レイ・ウルトウレス・フォルスネインと言います。

あ！因みに私の名前は…

クリス・レイ・ウルトウレス・フォルスネインと言います♪

まあ誰に向かって自己紹介しているのか解りませんが取り敢えずしたほうが良い気がしたのでして見ました♪

つとしてる間にどうやら報告が終った様ですね…、さてと私は準備でもしましょうか、どうせまた私が討伐に行く事になるでしょうし…私がそう思い動き出そうとした瞬間…

それは起きた…

ズドオオオオオオン！！！！

クリス 「なに！？」

グラン 「なんだ！？」

周りにいる兵士やその他大勢

「……っ！？」

天井が崩れ瓦礫の山が降ってきて、周りにいる者達は急いでその場から避難した。

クリス 「皆さん怪我は！？」

私はすぐに皆の方を向いて無事がどうか確認した。

兵士 「大丈夫です！我々を含め皆無事です！」

クリス 「そうですか…（よかった〜あ）」

どうやら怪我をした者達はいない様で私は心の中で安堵した。
あんど

すると…

??? 「っ！いつて〜え！皆大丈夫か？」

勇者 side

優魔 「っ！いつて〜え！皆大丈夫か？」

城にぶつかり瓦礫の山の下敷きになっていた俺は何とか瓦礫の山から抜け出し辺りを見渡すと…

周りにいる者達

「「「……………」」」

優魔 「……………」

固まった。

それはもう開いた口が塞がらなかった。

何故なら…

剣やら槍を持ったゲームでしか見た事がない鎧を着た者達がこれでもかって言う程にいたからだ。

俺が呆然としていると俺の近くにある瓦礫が動いた。

彰 「いつてえ！お、優魔無事だったか！」

桜 「凄いね…、あんな高さから落下したのに私達まるで無傷だよ…」

瓦礫から彰と桜が出て来てお互いの無事を喜んだがすぐに周りに気付いて俺と同じ様に固まった。

彰 「おい…、優魔これって…」

優魔 「ああ…ちょっとやばい状況だ…」

桜 「ちよつとどうするのよ…、段々こっちに来るわよ？」

桜の言う通り武器を持った多分兵士と呼ばれる者達がこちらに近付いて来ていた。

兵士A 「お前達は何者だ！もしかや王の命を狙う手の者か！」

俺達に近付いて来ていた兵士の一人がそう叫んだ…

優魔 「（凄いな…、言葉が解る、これも神の饞別ってやつか？）」

取り敢えず誤解を解かなければと思った俺は誤解を解くために口を開いた。

優魔 「え」と、俺達は怪しい者ではありません、俺達は「お前らあああああ！！！」は？」

俺が喋っている途中、瓦礫がぶつ飛び、怒号が響き渡った。

隼人 「お前ら！よくも俺を下敷きにしてくれたなあ！ぶつかつた時の衝撃が半端なくて意識が飛んじまったじゃねか！つつか友達を下敷きにするって、お前らは本当に人間か？この鬼！悪魔！冷徹人間！お前らの事なんてもう知らねえからな！」

瓦礫を吹っ飛ばして出て来た隼人は俺達に詰め寄り物凄い剣幕で怒鳴ってきた。

………うるさいな

俺がそう思った時…

桜 「うるさあああああい！！！」

隼人 「げふっ！？」

桜がいつの間にか隼人の後ろに回り込み、踵落しを隼人の脳天に食らわせた。

優魔&彰

「……………（ご愁傷様です）」

優魔 「……………（こいつ頭の中、虫でも沸いてんじゃね？）」

俺は隼人に対して捻り潰したい衝動を堪えて兵士達の方を向いて見た。

……見なきゃ良かった

兵士達を見ると皆、敵対心ばりばりの目で俺達を見ていた。

優魔 「（まあこうなるよな……）」

彰 「どうすんだよ……？皆凄い目で俺達を睨んでるぞ……？」

優魔 「どうするって言ったって……、隼人の所為で皆話を聞いてくれそうにないし……」

桜 「ちょっと……、悠長に話してる場合じゃないわよ……、皆今にも襲い掛かってきそうなんだけど……」

俺達が小声で話をしているとまるで桜の声にでも反応したか様に兵士の一人が声を上げた。

兵士 「答える！お前らは一体何者だ！返答によつてはただで済むと思うなよ！」

隼人 「はっ！おもしれえじゃねえか！答えなかったらどうなるって言うんだよ？」

隼人は馬鹿にした様な笑みを相手に向けた。

優魔&彰&桜

「「「（この馬鹿ああああ！?!?!?!）」「」」

隼人の言葉に俺達は額に冷や汗を浮かべた。

兵士「…………お前ら、覚悟はできているんだろうな?」

兵士の言葉に周りにいた他の兵士も武器を握る手に力を込めた。

そして…

兵士「この者達を捕縛する!行くぞ!」

兵士達が一斉に襲い掛かってきた。

桜「ちょ!?!どうするのよ!」

彰「隼人の馬鹿野郎!」

優魔「ちっ!」

隼人「面白くなってきたぜ!」

兵士の一人が桜に槍を突き出した。

桜「遅い…?、はあああああ!」

兵士「ぐふっ!?!」

ズドン!!

桜は腰を落として突き出せれた槍を躲すと兵士の懐に入り腹部に肘打ちを食らわせた。

兵士の鎧は桜の肘討ちにより凹みができ、そのまま何メートルか吹っ飛び壁にぶつかった。

兵士達 「……へ？」

優魔＆隼人？ 彰

「……は？」

俺達は自分達の目を疑った。

桜は確かに普通の者達よりは強い、それは理解している。

だけど桜は小柄な女の子だ、幾ら強いと言っても人間を、それも鎧を纏った大人を何メートルも吹っ飛ばすなど出来る訳がない。

いや、桜じゃなくてもそんな事は不可能だろう。

彰 「桜、今何をした……？」

桜 「私は何もしてないわよ……、ただ相手の槍を躲そうとして目に意識を集中したら急に相手の動きが遅くなって、それでそのまま肘打ちを食らわせたなら相手があんなに吹っ飛んだのよ」

彰の問い掛けに桜も何が何だか解らないと言った表情で答えた。

優魔 「成る程な……」

隼人 「なんだよ優魔、行き成り笑みなんか浮かべて」

俺は理解した。

桜の異常な力の訳を…

優魔 「紙に書いてあっただろ？俺達の身体能力を上げたと」

彰 「それでか…」

隼人「って事は…」

どうやら彰も理解した様だ。

すると急に隼人が兵士達の方を向いて笑み（黒い）を浮かべた。
俺も隼人と同じ笑みを浮かべて兵士達を見た。

優魔 「存分に暴れて良し！」

隼人 「よっしゃあ！てめえら覚悟しろ！」

隼人は近くにいた兵士に蹴りを食らわし、吹っ飛ばすと次の兵士に向かって行った。

それまで呆然としていた兵士達も隼人の行動により一瞬遅れて攻撃を再開した。

俺も兵士を一人二人と倒して行くと桜が声を掛けて来た。

桜 「ねえ？本当に良かったの？」

優魔 「何が？」

桜 「隼人に暴れて良いなんて言って…」

優魔 「ああ、別に問題無いだろ、馬鹿だけどこの中では一番強いし怪我を追う事は無いと思うよ」

よ？」

優魔 「いや、死人が出てるわけでもないし、暫くあのままにして敵を倒して貰おう」

桜 「そう…、まあ優魔がそれで良いって言うならいいけど…」

俺と桜が話しをしていると彰がこっちに歩み寄って来た。

彰 「ふう〜、こっちはあらかた片付いたな…って、うわ〜隼人の奴暴れてるなあ、止めなくていいのか？」

優魔 「まあな、後は隼人が相手にしてる兵士だけだし…、倒し終ってもまだ暴走してる様なら桜に止めさせるさ」

桜 「さてどうやって止めようかしら…、脳天に踵落としか、それとも鳩尾に肘鉄を何発か食らわせるのも捨て難いわね…」

彰 「……………（隼人、死ぬなよ？）」

つと話しをしてる間にどうやら決着が着いたようだ。

隼人 「これでラストオオオ！！」

兵士 「ぐはっ！」

隼人 「おいおい！これで終わりかよ？兵士って言うのはこの程度か？もつと俺を楽しませろ！」

辺りを見渡すと破壊された壁に、倒れ伏す兵士達で埋め尽くされて

いた（主に隼人の周辺）。

クリス side

クリス「こんな事が…」

私は目の前で起きている事が信じられなかった。

クリス「（あれだけいた兵士達をたったの4人で全滅させるなんて…）」

辺りを見渡して見ると倒れ伏す兵士達で埋め尽くされていた。
私は無意識に呟いた…

クリス「貴方達は一切…」

勇者 side

クリス 「貴方達は一体…」

隼人 「あ？何だてめえは？」

少女の呟きを聞いた隼人は少女を睨んだ。

睨まれた少女は隼人に睨まれ一瞬怯むが負けずと睨み返した。

クリス 「っ！私の名はクリス・レイ・ウルトウレス・フォルスネイン！このフォルスネイン王国の一の姫です！貴方達は何者ですか！行き成り天井を突き破って現れるは、何かを話してらっしゃると思つたら暴れ出すは、これ以上此処にいる者達を傷付けると言つたら私が相手をします！」

優魔&彰&桜

「「「なっ！？」「」」

少女の叫びを聞いた俺達は絶句した。

まさか姫様まで出て来るとは思わなかったからだ。

彰 「どうする…？」

桜 「流石に姫様をぶっ飛ばす訳にはいかないわよね…？」

優魔 「つつか…、段々俺達って勇者から遠ざかってないか？」

彰 「それ以前に勇者って柄じゃないし…」

桜 「で、どうするのよ？」

彰 「今なら兵士も気絶してていないし…、逃げるって言うのも手だよな…」

俺達が話し合っていると隼人が姫様に向かって歩み寄った。

隼人 「何者だと聞いたな？いいぜ教えてやるよ」

隼人は姫様から5メートルぐらいの距離で足を止めた。

彰 「おい…、あいつまさか…」

優魔 「多分、そのまさかだろうな…」

桜 「信じる人なんていないと思うけど？」

彰 「右に同じ…」

俺達が小声で話し合っていると隼人が笑みを浮かべながら口を開いた。

隼人 「何を隠そう！俺達はこの世界を救いに来た勇者達だ！」

クリス 「……………はい？」

隼人の言葉を聞いたクリスは首を傾げた。

他の者達も、何言ってるんだこいつ？、的な目で隼人を見ていた。

クリス 「勇者って…、私達をからかっているのですか？」

優魔&彰&桜

「……（ほゝらね……）」

俺達は予想通りの反応に苦笑いを浮かべた。

隼人 「おいおい何だよその目は、言っておくが俺は嘘はついてないぜ」

クリス 「もつとましな嘘をついたらどうですか？それとも…、その勇者の力って言うのを私に見せてくれますか？」

クリスは挑発的な笑みを浮かべた。

クリスの言葉を聞いた隼人は面白そうに笑みを浮かべて口を開いた。

隼人 「はっ！おもしれえ！言つとくが俺は女だからって手加減しねえからな！」

クリス 「手加減なんて要りませんよ、どうせ勝つのは私ですし♪」

隼人 「本当におもしれえ姫さんだ！よし、表に出ようぜ！此処じやあ瓦礫が邪魔だ」

クリス 「別に構いませんよ、何処でやろうが私の勝ち揺るぎませんから♪」

そう言つて隼人とクリスは外に向かって歩き出した。

彰 「何だか凄い事になったな…」

桜 「あの喧嘩馬鹿…」

優魔 「……………」

彰と桜は外に向かう隼人の背中を稍やや呆れ顔で見詰めていた。

優魔 「（あの女…）」

彰 「どうした？優魔」

俺が少し考え事していると彰が喋り掛けて来た。

優魔 「血がざわつく…あの女から何か強い力を感じる…」

俺がそう言うところでは桜が口を開いた。

桜 「強いと言っても隼人には敵かなわないと思うけど？」

優魔 「俺だって隼人が負けとは思わないが、俺の中に流れる血がざわついてならないんだ」

彰 「優魔…」

俺の言葉に彰が心配そうに俺を見た。

優魔 「そんな顔するなよ…俺はまだ壊れないさあ行こうぜ」

俺はそう言って歩き出した。

彰達も俺の後に続いて歩き出した。

優魔 「俺はまだ、壊れない、いや…まだ、壊れる、訳にはい
かないだ…例えそれが進めば進むほど傷付くイバラの道だろうと俺
はその道を進んで行くと決めたのだから…」

そして出会いは突然に（後書き）

作者 「どうでしたか？ 質問等がありましたら言っ
て下さい、それでは皆さんまた次回まで」

そして勇者の中に眠る者（前書き）

作者 「やっと投稿出来ました、それでは本編をどうぞ」

そして勇者の中に眠る者

クリス 「武器は持っていないのですか？」

外に出たクリスは隼人にそう尋ねた。

隼人 「んな物必要ねえよ！てめえなんざこの拳で十分だ！」

隼人はそう言つてクリスに拳を向けた。

優魔 「……………」

彰 「そんな難しい顔をしなくても隼人なら大丈夫だつて」

桜 「彰の言う通りよ、こっちは身体強化されてるし、向こうは武器を持ってるけど、どうせ喧嘩もした事がないお姫様なんだから」

優魔 「だといいけどな……」

俺達は少し離れた所で隼人を見守っていた。

その反対側では気がついた兵士達が俺達と同じ様にクリスを見守っていた。

隼人 「いくぞ！」

隼人はそう言つて勢いよく走り出した。

クリス 「速い！？」

隼人 「はあああああ！！！」

隼人はその勢いそのまま飛び蹴りを放った。

クリス 「（スピードはなかなかだけど、攻撃が単調すぎる、これなら躲せる！）」

クリスは身体を横にずらして隼人の飛び蹴りを躲すと隼人の着地地点に持っている剣を横薙ぎに払った。

隼人 「まだまだああ！」

隼人は低い姿勢のまま後ろ蹴りを放った。

蹴りは剣に当たり、クリスの剣は隼人の繰り出した蹴りによって折れてしまった。

クリス 「そんな！？」

隼人 「おらよ！」

隼人はそのまま身体を捻ってその勢いで回し蹴りを繰り出した。

クリス 「っ！」

クリスは咄嗟に腕を自分の頭に持っていきガードの体勢に入った。

隼人の繰り出した蹴りはクリスの腕に当たりクリスはそのまま何メートルか吹っ飛んだ。

隼人 「っ！かてえ…何だ今は…」

隼人は蹴りを行つた足を抑えて吹っ飛んで行つたクリスの方を見た。

クリス 「くっ！全力で腕に魔力を集中させても此処まで威力があるなんて…、まあ、骨が折れるのだけは回避出来ましたが、暫くはこの右腕は使えませんか…」

そう言うクリスの右腕は力なく垂れ下がっていた。

隼人 「どうする、まだやるか？」

隼人はそう言つて笑みを浮かべた。

クリス 「当たり前です、まだ勝負はついてませんよ？」

クリスも同じ様に笑みを浮かべてそう言った。

隼人 「ハっ！いいねえ！ガッツのある奴は大好きだ！」

隼人はそう言つてクリスに向かって走り出した。

クリス 「剣が折れても私にはまだ魔法があります！」

クリスはそう言つて左手を隼人に向けた。

クリス 「撃ち抜け閃光・レイ！」

クリスの手から光が光線の様に放たれた。

隼人 「なっ！？」

光は真つ直ぐと隼人に向かっていき…

ドオオオオン！

直撃した…

優魔 「は…や…と？」

桜 「うそ…？」

彰 「そんな…、隼人が？」

やがて土煙が止むと地面に倒れ伏す隼人の姿がそこにあった。

クリス 「手は抜きました、命に別状はないと思います」

クリスが何か喋っているが俺には何も聞こえなかった…

何処からか声が響く…

『殺セ…』

『殺セ』

『殺セ！』

優魔 「うつ…あ…うつ…」

彰 「おい！？優魔！どうした！」

桜 「どうしたの!？」

彰 「解らない!行きなり優魔が蹲^{うすくま}つて!」

彰達が何か言ってるが何も聞こえない…

なのに…

『殺セ!』

『殺セ!』

『奪ワレタクナインダロ?』

『無クシタクナインダロ?』

『ナラバ殺セ!』

『アソコニ居ルアノ女ガ…』

『才前ノ…ソシテ俺ノ…』

『獲物ダアアアア!』

優魔 「うっ…う…あ…うっ…あああああ!」

彰 「ゆ…うま?」

桜 「彰!まさかこれって…」

彰 「隼人がやられた事で優魔の中に眠っていた、鬼が目覚めるのか…？」

そして優魔は静かに立ち上がった。

優魔 「……………」

彰 「ゆう…ま…？」

優魔 「殺…ス…」

優魔が呟いたその瞬間優魔の身体から尋常じゃない程の殺気が放たれた。

桜 「っ！此処から今すぐに逃げて！じゃないと貴方、優魔に殺されるわよ！」

クリス 「ひっ！」

桜がクリスに向かって逃げる様に促すがクリスは優魔の殺気に当てられ足が竦んで動けないでいた。

優魔 「クククッ！フハハハハハハハハ！」

彰 「優魔！落ち着け！落ち着くんだ！お前はまだ、堕ちる、には早い！」

彰が俺に何かを叫んでいるが今はそんな事はどうでもいい…

俺は今すぐにでもあの女の肉を裂き、骨を砕き、血を浴びたい…

優魔 「クククッ!…」

そして俺は走り出す…

あの女の血を浴びるために…

彰 「やべ!早く逃げる!」

彰がそう叫んだ後には俺はもうクリスのすぐ近くまで来ていた。

クリス 「い…や…」

俺は腕を伸ばし、まずは女の首をへし折ろうとした瞬間…

隼人 「おいおい優魔、こいつは俺の喧嘩相手だぜ?邪魔するなよ」

あと数センチという所で横から伸びた隼人の手によって止められた。

優魔 「ハ…ヤ…と?」

隼人の姿を見た瞬間、全身から力が抜けて行き俺の意識は闇に落ちた。

隼人 「おっと」

隼人は倒れかけた優魔を腕で支え、優魔の腕を自分の肩に回すとクリスの方に向き直った。

隼人 「大丈夫だったか?姫様よお」

クリス 「え？あ、はい！大丈夫です…」

隼人 「そいつは良かった…、悪かったな恐い思いをさせちゃって」
隼人はそう言つて優魔を支えながら彰達の方へ向かった。

クリス 「（さっきまでの恐怖が嘘の様に消えてる…）」

クリスの脳裏に先程の光景が浮かび上がった。

突然感じた恐ろしいまでの殺気…

伸ばされた腕…

そして湧き出した死の恐怖…

でも、そんな恐怖から私を救ってくれた人…

クリス 「ハヤト様…／＼／」

クリスはやや紅く染まった頬し隼人の背中を見ながら小さくそう呟いた。

彰 「隼人！優魔！」

一方…、彰達はこちらへ向かって来る隼人に大声を上げて駆け寄った。

隼人 「優魔は気を失っているだけだから取り敢えずは大丈夫だ」

桜 「あんたは大丈夫なの？」

桜の言葉に隼人は笑みを浮かべた。

隼人 「俺があんなちやちな技でやられるかよ、俺を殺したかったら核爆弾でも持って来いつてんだ！」

彰 「うん、いつもの隼人だな…」

桜 「それでこれからどうするの？」

桜が険しい顔をして辺りを見渡すと兵士達が自分達を囲んでいた。

隼人 「優魔を守りながら戦うとなると少しつれえなあ」

彰 「だけど…」

隼人&彰&桜

「「やるしかない！！！」」

隼人達の言葉を合図にしたかの様に兵士達がそれぞれの武器を構えてこちらに向かって来た。

兵士A 「おのれ！よくも姫様を！」

兵士B 「姫様に牙を向けた事を後悔するがいい！」

とその時…

クリス 「やめなさああああああい！！！」

クリスの怒号が辺りに響き渡った。

クリス 「この者達はこの国に害を及ぼす者でも、王の命を狙いに来た者達でもありません！それは、隼人様と戦い解りました！この方の拳はとても真っ直ぐで純粋な物です！」

それを聞いた兵士達に響めきが起こった。

兵士A 「姫様は何を言っているんだ？」

兵士B 「まさか…、賊共を庇っていらっしやるのか？」

隼人達も目を見開いてクリスを見ていた。

彰 「喧嘩で生まれる友情ってほんとにあるんだな…」

桜 「……（隼人様って…はは〜ん、そう言う事、これはちょっと面白い事になりそうね）」

隼人 「まさか喧嘩相手に庇われるなんてな…」

するとクリスがこちらに近づいてきた。

クリス 「隼人様達は私と一緒に応接室まで来ていただけませんか？お話を聞かせてほしいのですが」

隼人 「ああ、別にいいぜ」

隼人がそう言うくとクリスは「こちらへ」と言って歩きだし、隼人もそれに続いた。

兵士 「ちよつと待つ… 陛下？」

兵士が声を上げ様としたがグランがそれを制した。

グラン 「よい、あのまま行かせてやれ」

兵士 「ですが陛下！あの者達は…」

グラン 「クリスがああ言うのだ、きつとその通りなのだろう…、私もあの者達と話しをしてくる…皆にはすまないが、城の中にある瓦礫を片付け、この荒れた庭を戻しておいてくれ」

兵士 「……かしこまりました」

兵士達は渋々と言った感じに与えられた仕事に取り掛かった。

此処は応接室…

部屋の中央に少し長いテーブルとそのテーブルを挟む様にソファが2つ 設置されており、テーブルには先程使用人…、まあ隼人達

の世界で言う所のメイドと呼ばれ人が持つてきてくれた紅茶が置かれている。

ソファーには真ん中に隼人、左に彰、右に桜と言う順に座り、反対側にはこの国の王であるグランと、その娘のクリスが座っている。優魔は此処に来る途中でグランがメイドに頼み医務室に運んでもらった。

グラン 「さて、先ずはお互いに名乗るとしうか、私の名はグラン・レイ・ウルトウレス・フォルスネイン、この国の国王を勤めている」

グランはそう言うて自分の名前を名乗ると次にフィアが口を開いた。

クリス「改めて名乗らせてもらいます、私の名はクリス・レイ・ウルトウレス・フォルスネインと言います、この国の第一の姫です」

クリスが名乗り今度は桜が口を開いた。

桜 「私の名前は清水 桜と言います、こつちの世界では桜 清水と名乗ったほうがよろしいでしょうか？どうぞよろしく願います」

隼人 「俺の名は隼人 小川だ、よろしくな」

彰 「僕の名前は彰 清水です、よろしく願います」

桜、隼人、彰と言う順に名乗るとグランが口を開いた。

グラン 「そんなに固くなんなくともよい、そちらの隼人殿と同じように砕けた物言い結構だ、さて自己紹介も済んだ所で早速本題

に入ろうか、先程サクラ殿が言った、こちらの世界、とはどういう意味かね？」

桜 「お話ししますが最初に言っておきます、到底信じられる話ではないと思います」

桜はそう言って自分達に起きた出来事を話した。

それから数分後…

桜 「……と言う訳でこれで全てお話ししました」

グラン 「ふむ…とても信じられなり話だな…」

クリス 「そんな事が…」

桜の話しを聞いたグランは難しい顔をして腕組みをして考え込み、クリスは目を見開いて隼人達を見ていた。

桜 「もう一度言っておきますが私がお話した事は全て事実です、それでも信じられないと言うのであれば私達を捕えるなり何なりして下さって結構です、勿論私達は全力で抵抗させてもらいますが…」

グラン 「……いや、君達が嘘を言っていないのは目を見れば解る、これでもいろいろと経験を積んでいるのでね、ただ一つ聞かせてほしい、この世界が滅びへと向かっていて君達がそれを止める為にこ

の世界にやって来たのは解った、だがどうやってこの世界を救う気かね？」

桜 「それは…まだ解りません、ですがこのまま世界が滅びればこの世界にいる私達人間を含む全ての生き物達も一緒に滅ぶでしょう、私は…いえ、私達はそれを見て見ぬ振りなどできません！だから私達は私達が出来る事をします！私達に一体何が出来るかは解りませんがきつと何か出来る事があると思いますから！」

桜の言葉を聞いたグランはまた何かを考える様に腕を組み、目を閉じた。

クリス 「お父様…」

暫く考え込んでいたグランはクリスに喋り掛けられ目を開き、桜達を見て口を開いた。

グラン 「我々の世界が滅びに向かっていると解った今、この世界の住人である我々が何もしない訳にはいけない、桜殿、隼人殿そして彰殿、我々もこの世界を救う為に力を貸そう、いや違うな…我々にも君達の協力をさせてくれ！」

グランはそう言ってソファから立ち上がると頭を下げた。

クリス 「私からもお願いします！」

クリスもグランに続いて同じ様に頭を下げた。

桜 「頭を上げて下さい、私達はこの世界の事を何も知りません、なのでいろいろとこの世界の事を教えてほしいのですが？」

桜はそう言って立ち上がるとグラン達に手を差し出した。
隼人と彰も同じ様に達上がり手を差し出す。

グラン 「それは…」

桜 「これからよろしくお願いします」

彰 「僕達に力を貸して下さい」

隼人 「これからよろしくな！」

グランとクリスは桜達の言葉に笑みを浮かべて桜達の手を握り一言…

グラン 「こちらこそよろしく頼む！」

クリス 「これからよろしくお願いします！」

と言ってお互いに手を固く握りあった。

クリス 「あの〜所でお聞きしたい事があるのですが…」

暫く握りあい、ソファーにグラン達が座り直すとクリスが口を開いた。

隼人 「なんだ？」

クリス 「あの時…私と隼人様が戦った時の事何ですけど、隼人様が私の魔法をくらい気絶した時、ユーマさんと言ったのでしょうか？
あの方は一体何者なんですか？明らかに正気を失っていた様に見える

たのですが…」

クリスの言葉に隼人、彰、桜の三人は息を飲んだ。

隼人 「それは…わりいな、俺達の口からは言えないんだ、どうしても聞きたいなら優魔に直接聞いてくれ…」

クリス 「解りました…」

クリスは自分が何かいけない事を聞いてしまった様な気がして少し暗い顔した。

とそこでグランが口を開いた。

グラン 「では私はそろそろ戻るとしよう、使用人の者に君達を部屋へ案内してあげる様に頼んでおこう」

桜 「ありがとうございます、ですが先に優魔の事が心配なので姿を見に行きたいのですが先に医務室によってもよろしいですか？」

グラン 「ああ別に構わんよ、では私はこれで」

そう言ってグランは部屋から出て行った。

クリス 「あの、私もお供してよろしいですか？」

隼人 「別に構わねえよ、じゃあ行こうぜ」

隼人達も部屋からでて医務室に向かった。

「此処は何処だ？」

気がつくとも俺は霧が掛かった大きな湖の中央に立っていた。
不思議と身体は沈まない。
これは夢なのだろうか？

『残念だが夢じゃねえんだなこれが』

「っ誰だ！」

後ろから何処かで聞いた事がある様な声がして振り返ると…

『おいおい！誰だはねえだろ！誰だは！お前は自分も解らないのか？』

そこには、俺がいた

『そつだ、俺はお前だ…優魔』

優魔 「っ！（心を読まれたのか？）」

俺の姿をした何かは笑みを浮かべて近づいて来た。

『読めるに決まってるだろ？俺はお前だ、お前が考えている事なんて解るに決まってる、もちろんお前は俺だから俺が考えている事が手に取る様に解ると思うぜ！』

優魔 「お前は一体何者だ！何故俺の姿をしている！此処は何処だ！」

『だから何度も言ってるだろ？俺はお前だ、同じ姿をしているのは当たり前だろ？で此処はお前の心の中だ』

優魔 「心の中だと？」

俺は辺りを見渡して見た。
見渡すと辺り一面霧に囲まれていて何も見えない。

『不服か？』

優魔 「いや、俺の心の中だと言われると納得が行く、迷ってばかりの俺にはお似合いな所だ…」

『そうかよ』

優魔 「だが…お前が俺とはどう言う意味だ？」

『今に解るさ…っとそろそろ時間のようだな』

優魔 「なに？」

すると急に俺の姿をしたあいつが霧の中で霞んでいき周りの景色がガラスの様に碎け散った。

優魔 「っ！此処は…」

隼人 「お！起きたか優魔」

優魔 「……隼人？」

気が付くと俺はベッドに寝かされ、彰と桜が心配そうに俺を見ていた。

優魔 「何で俺はベッドに寝てるんだ？」

彰 「気絶したお前を使用人の人が此処まで運んでくれたんだよ」

優魔 「そうか…、所で今俺達はと言う状況にいるんだ？」

俺は後ろにいるクリスを見てそう言った。

桜 「私が話すわ、実は…」

数分後…

優魔 「成る程な…、まあ取り敢えずこれで拠点は確保できたと言

う所か、流石に寝る所や食い物が無いんじゃないかな」

そう言っただけはクリスに左手を差し出した。

優魔 「改めて自己紹介をさせてくれ、俺の名前は優魔 月宮だ、よろしく」

クリス 「私の名前はクリス・レイ・ウルトユレス・フォルスネインです、どうぞクリスと呼んで下さい、こちらこそよろしくお願いしますユーマさん」

そうして俺とクリスはお互いの手を握りあった。

優魔 「（発音が少し変だったがあいいか）」

とそこで隼人が険しい顔で口を開いた。

隼人 「ところで優魔、大丈夫か？」

大丈夫か？

この言葉に込められた意味を俺は理解している…

だから俺は精一杯の笑みを浮かべる…

大切な友達を安心させるために…

俺はまだ壊れない、堕ちはしないと安心させるために…

優魔 「ああ大丈夫だ、心配を掛けたな」

隼人 「そうか…ならいいんだ、俺達は部屋に戻るがお前はどつする？」

優魔 「俺はもう少し此処で休んでるよ、まだ少し眠いし」

隼人 「解った、じゃあな…飯時になつたらまた来るよ」

優魔 「ああ…頼んだ」

俺の言葉を最後に隼人達は部屋を出て行つた。

クリスだけを残して…

優魔 「どうしたクリス？」

クリス 「あの、お聞きしたいことがあるんですけど…」

優魔 「なんだ？」

クリスは少し迷つた様な顔をしたが意を決して口を開いた。

クリス 「私と隼人様の戦いでの事です」

優魔 「……………」

クリスの言葉で俺とクリスを包み込む空気が変わった。

クリス 「あの時…隼人様が私の魔法をくらい、倒れた時、貴方は突然に疼くまり、苦しみ出した様に見えました…そして貴方が立ち上がった時尋常ない程の殺気を貴方から感じました、貴方は明らかに正気を失っていた…、こんな言い方は失礼かと思いますが…貴方は一体何者なんですか？」

優魔 「……………」

俺は天井を見上げて考えた…

もし俺の事を話せばクリスは俺を恐がるんじゃないか…

俺を化け物を見る様な目で見るんじゃないか…

そう思うと俺は怖くて怖くて仕方がなくなった。

だけど…

「逃げてばっかじゃ何も始まらない…」

「立ち止まっていたら何も変わらない…」

「同じ景色しか見えないんだ」

俺は昔、あいつが言った言葉を思い返しクリスのほうを向いた。

優魔 「俺は…」

そして俺は話し出した…

クリスがどんな反応をするか解らない…

だけど俺は逃げたくないから…

立ち止まりたくないから…

俺は決めたんだ…

例えそれが…

進めば進む程傷付くイバラの道だろうと…

俺はその道を歩んで行くと決めたのだから…

そして勇者の中に眠る者（後書き）

作者 「どうでしたか？誤字脱字がありましたら指摘して下さい、
次の後書きはキャラクター紹介をする予定です、それでは皆さん
また次回まで」

彰 「おい作者、なんで本編じゃなくて後書きの次回予告なんてし
てるんだよ……」

作者 「お前はまだ出て来るな！いでよタライ！」

何処からともなく彰の頭にタライが降ってきた……

ガン！！！

彰 「ぐふっ！……」

作者 「これでよし……え」と、読者の皆様に言い忘れた事があるの
でお伝えします、次回から優魔達の名前ですけど……」

隼人↓ハヤト

彰 ↓アキラ

桜 ↓サクラ

優魔 ↓ユーマ

作者 「と言う風にカタカナで表示します、では今度こそ、それでは皆さんまた次回まで」

彰 「……………↑（忘れられてる…）」

ブツ ……………

そして勇者の新たな生活（前書き）

作者 「約二ヶ月もの間お待たせしてすみませんでした！別に何か用事があつた訳ではありませんが、最近かなり疲れていまして小説を書く気になれませんでした、暫くはこの様な事が続くかもしれないかもしれませんがどうぞ温かい目で見守っていて下さい、それでは本編をどうぞ！」

そして勇者の新たな生活

ユーマ 「俺は自分の身体に、鬼を宿している……」

クリス 「……………」

そうして俺は自分の事を話し出した。

クリスはただ静かに俺の話を聞いている。

ユーマ 「鬼と言うのは別に頭に角を生やした生き物じゃなくて俺の中に存在する感情の事を俺の家系ではそう呼んでいる」

クリス 「感情……？」

ユーマ 「殺意と言う名の狂気のことだ……」

クリス 「……？」

クリスは俺の言葉を聞いてよく解らないと言った風な表情をした。

ユーマ 「解らないか？じゃあここで俺の家系について説明しておく」

俺はそう言って話を進めた。

ユーマ 「さっき俺は自分の名を名乗る時に、月宮と名乗ったがこれは母方の姓だ」

クリス 「……………」

クリスは俺の言葉にそれが何だと言う様に眉間を寄せた。

ユーマ 「そんな顔をするなよ、大事なのは父方の姓だ」

俺は今、どんな顔をしているのだろう…

ユーマ 「親父の名前は鬼原 千尋（きはら、ちひろ）と言う、鬼と言う字に野原の原で鬼原だ」

きっと悲しい様な憎む様な、そんなよく解らない表情をしているんだろうな…

ユーマ 「鬼原家は代々鬼の一族として世間から忌み嫌われてきた、その理由が殺意と言う名の狂気が原因だ」

俺の脳裏に頭に響いた『殺セ』と言う言葉が浮かび上がり頭の中に染み入る様に消えていった。

ユーマ 「狂気は代々産まれてくる子供にも引き継がれていく、そして…狂気を引き継いだ子供は鬼になる…」

クリス 「それは一体どう言う…」

クリスが喋り終わる前に俺は口を開いた。

ユーマ 「人を襲うんだ…」

クリス 「なっ!?!」

俺の言葉にクリスは勢いよく椅子から立ち上がった。

俺は話しを続けた…

ユーマ 「血を浴びたい、悲鳴を聞きたい、恐怖に歪む顔が見たい、肉を裂きたくて堪らない、内臓を体内から引きずり出したくて堪らない、人を殺したくて堪らない…」

クリス 「うつ……」

クリスは気分が悪くなったのか顔色が悪く、口を押さえた。

ユーマ 「そういった欲求が脳を身体を支配する、それが鬼の正体だ…、そしてそれが俺の正体だ…」

クリス 「そんな…では貴方は…」

クリスの表情は恐怖に染まっていた。

それはそうだろう…

今のクリスは例えるなら蛇に睨まれた蛙だ…

いつ殺せれるか解らない状況にいる…

きっとそう思っているだろう…

ユーマ 「俺が恐いか？」

クリス 「つつ！別に恐いだなんて思っていないせん…」

俺は自嘲気味な笑みを浮かべてそう言う。とクリスは凶星だったのか顔を少し歪めると俺の言葉を否定した。

ユーマ 「身体が震えているぞ？…別に恐怖を感じる事は悪い事じゃない、寧ろそれが当然の反応だ」

クリス 「……………」

俺の言葉を聞いたクリスは俯いてしまったが少しすると顔を上げて口を開いた。

クリス 「……………もしも貴方の話しが本当だとしたら…貴方は正気を保っていないはず…それなのにこうして落ち着いて話しができるのはどうしてですか？」

ユーマ 「精神力の問題さ」

クリス 「精神力？」

ユーマ 「自分の中の狂気を強い意思で…つまり理性で抑えつけているって事だ」

俺が話し終わるとその場に静寂が訪れた。

クリス 「……………」

ユーマ 「恐いのならもう俺の傍に寄らなくていい…」

クリス 「え…？」

俺は静寂を破って言葉を紡いだ。

ユーマ 「恐いのならもう俺に喋りかけなくてもいい…俺もお前の傍に寄らないし、喋りかけもしない…」

クリス 「何を言っ…」

クリスの言葉は続かなかった…

事実ユーマに恐怖を抱いていたのは本当だったから何を言っ…いいのかクリスには解らなかった…

ユーマ 「それに…そんな顔で、そんな目で俺を見るなら頼むから俺には関わらないでほしい…」

俺は止めとばかりにそう言う…とクリスは手を固く握り締め、顔を俯かせて部屋の出口へと歩いていった。

クリス 「ごめんなさい…」

ドアまで歩いたクリスは小さくそう呟いて部屋から出ていった…

ユーマ 「最低だな俺は…」

クリスが部屋から出ていってから少しして俺はそう呟いた…

ユーマ 「あんな一方的に拒絶しなくてもいいだろ俺の馬鹿野郎」

俺は自分にたいしそう悪態づく…と天井を見上げ親父が最後に言った

言葉を思い返した。

「お前は俺の様にはなるなよ…」

ユーマ 「俺はあんたの様にはならないさ…」

俺はそう言っで眠りに就いた。

一方ハヤト達は…

ハヤト 「暇だ〜」

アキラ 「暇だね〜」

無駄にでかいキングサイズのベットに横になり二人はそう呟いていた。

サクラ 「あんた達それ言っでんのこれで28回目よ?」

それを飽きれ顔で見ていたサクラが溜め息混じりにそう言つとハヤトとアキラは起き上がり口を開いた。

ハヤト 「だつてよ〜マジでする事ねえし」

アキラ 「そうだよ、勝手に出歩く訳にはいかないし、暇でしょうがないよ…って、ん?」

アキラが喋り終わると同時に誰かが部屋の扉をノックした。

サクラ 「誰？」

サクラはそう言って扉に近づきドアノブに手をかけた。

クリス 「失礼します…」

ハヤト 「なんだクリスかよ…って、どうした？」

クリスの様子が明かにかしい事にハヤトは怪訝な表情をした。

クリス 「……………」

ハヤト 「…ユウマか？」

クリス 「……………」

クリスは何も話さないがハヤト達はそれで何があったのか大体を理解した。

ハヤト 「たくあいつは仕方がない奴だな…」

クリス 「…私は…最低です…」

クリスはそれまで閉じていた口を開いた。

ハヤト 「……………」

クリス 「ユーマさんの言う通り、私は恐かった…丸で氷でできた

手で心臓を鷲掴みにされる様なそんな錯覚に囚われてしまう程に…」

クリスは自分の拳を強く握り、震えていた。

クリス 「私は…私はユーマさんを化け物を見る様な目で見てしまったんです！ユーマさんは人間なのにっ！あの目を見れば解ります！きつと過去にもその人成らざる血の所為で辛い目に会ってきたんです！それなのに私は…私はっ！」

ハヤト 「落ち着けよ…」

それまでクリスの言葉を静かに聞いていたハヤトが口を開いた。

ハヤト 「そこで叫んでいても何が変わる訳じゃないだろ？…お前は何がしたいんだ？」

その言葉にクリスは顔を上げた。

クリス 「私は…私はユーマさんとお話しがしたいです！もつとお互いにいろんな事を教え合ってハヤト様達と同じ様にお友達になりたいです！」

クリスの言葉にハヤト達は笑みを浮かべた。

ハヤト 「なら時間の問題だ、お前が今のその気持ちを忘れなければきっとユーマも心を開いてくれるさ、って言うよりも無理矢理にでも開かせろ！殴っていいから開かせろ！友達って言うのは喧嘩で生まれるものだ！解ったか！「んな訳ないでしょ！」ぎやあああああああああああ！！！！！」

ハヤトが喋り終わると同時にサクラの踵落とし（正式名称はドタマ
搗ち割り雷＜イカズチ＞落とし↑サクラ命名）が炸裂した…

クリス 「は、ハヤト様!？」

サクラ 「なああにふざけた事言ってるのよ!この喧嘩馬鹿!」

ハヤト 「……………↑（頭から血を流して倒れている…）」

サクラは倒れているハヤトを、踏み付けながら腕を組み、見下ろした。

クリス 「何やってんですか!？ハヤト様が死んでしまいます!」

サクラ 「大丈夫よ♪……アキラ?大体今、何分ぐらい経った?」

アキラ 「え〜と2分ちよいかな」

サクラ 「ならもう少しね」

サクラはそう言ってハヤトを踏み付けている足を退けた。

クリス 「あの〜一体何が?」

クリスがよく解らないと言った表情を見るとサクラ達は秒読みを開始した。

アキラ&サクラ

「5! 4! 3! 2! 1!」

そして…

ハヤト 「死んでたまるかああああ！！！！」

クリス 「！？」

頭から血を流していたはずのハヤトが勢いよく立ち上がった。

アキラ 「相変わらず凄い回復スピードだな…」

サクラ 「ね」だから大丈夫って言ったでしょ？」

そんなサクラ達に呆気にとられた様にクリスはただ呆然とその光景を見ていた。

ハヤト 「何が大丈夫だ！俺じゃなかったら確実に死んでるぞ！？」

サクラ 「当たり前よ！ハヤトだから殺ってるのよ！」

ハヤト 「殺るな！それでも友達か！？おいアキラ！お前も何か言
つてやれ！」

アキラ 「むり！」

ハヤト 「即答された！？友達なのに！なんの躊躇も無く即答され
た！？一応聞くけどお前ら俺の友達だよな！？」

サクラ&アキラ

「「……………」」

ハヤト 「黙るなああああ！！！！」

クリス 「ぷっ……」

ハヤト&サクラ&アキラ

「っっん？」

それまで呆然と見ていたクリスが口元を押さえて小さく笑ったと思うと吹き出す様に笑いだした。

クリス 「ぷつくくくっ あはははははははははは！くっ 苦ひいはははははははは！あ、貴方達面白すぎです！ひいははははははははははは！」

それん見ていたサクラとアキラも釣られて笑いだすがハヤトだけは怒った様に怒鳴りだした。

ハヤト 「笑い事じゃねえぞ！？こっちはマジで死にかけたんですけど！？」

サクラ 「ふふふっ」別にいいじゃない、死にかけたただけであんたは絶対に死にはしないんだから」アキラもそう思うでしょ？」

アキラ 「うん、そうだね、ハヤトは何があっても死なないから… 仮に死んだとしても神様や閻魔大王でもぶっ飛ばして蘇って来るだろうし…」

ハヤト 「お前らの中で俺って一体どれだけ最強なんだよ！？そんな風に思われてたなんてびっくりだよ！？畜生！」

三人のやり取りが本当に面白いのかクリスは笑みを浮かべながら口

を開いた。

クリス 「ふふふっ、本当に面白い方達ですねハヤト様達は、ユーマさんがハヤト様達に心を開いている理由が解る気がします」

ハヤト 「そうか？別に俺達はいして何もしてねえけどな」

クリス 「きつとハヤト様達と一緒にいるのが楽しいんですよ？」

ハヤト 「俺はちつとも楽しくないけどな、つつか時が経つ事に俺の扱いが酷くないか？」

サクラ&アキラ

「「気の所為、気の所為」」

ハヤト 「絶対に気の所為じゃないような…まあいいや、所でクリス？」

クリス 「はい、何ですか？」

ハヤト 「暇でしょうがないんだけど…俺とバトラねえ？」

サクラ 「ポキポキポキ♪↑（サクラが指を鳴らす音）」

ハヤトの言葉にサクラは後ろで笑顔で指を鳴らし、クリスは困った様な笑みを浮かべた。

クリス 「それはちよつと…」

サクラ 「そんなに闘いたいなら私が相手してあげるけど…どうす

る？（黒笑）」

ハヤト 「じょつ冗談だって…」

サクラの言葉にハヤトは頬を引き攣らしてそう言った。

アキラ 「でも本当に暇なんだけど、クリスさん何か暇つぶしになる様な物でもない？」

クリス 「うゝん、そうですねゝ」

アキラがそう言うのとクリスが何か考える素振りを見せたが少しして何か思い付いたのかハヤト達を見て口を開いた。

クリス 「でしたらハヤト様達の属性と魔力でも測ってみましょうか？」

ハヤト 「何だそれ？」

クリス 「話を聞くかぎりハヤト様達には魔力が備わっているらしいのでどのくらいの魔力があるのか、またその魔力の属性は何なのか調べてみましょうと思いますして」

クリスがそこまで喋るとアキラが口を開いた。

アキラ 「魔力は何となく解るけど…属性って何？」

クリス 「属性って言うのは、火 雷 風 氷 水 土 闇 光の8種類の魔法の属性があって、どの属性かによって使える魔法が違うんですよ」

アキラ 「成る程、つまり火属性を持っている人は火属性の魔法しか使えないって事か…」

クリス 「まあそうなりますね、稀にですけど属性を複数持っている人もいますけど、それも本当に極稀です」

サクラ 「ふうん、暇つぶしにはいいんじゃない？早く測りましようよ」

サクラの言葉にアキラが苦笑を浮かべた。

アキラ 「なぐんだ、サクラも暇だったんじゃないか」

サクラ 「うつ煩いわね！」

それを見ていたクリスも苦笑を浮かべた。

クリス 「くすつ、ではこちらへ」

クリスはそう言って部屋の外へと歩きだし、ハヤト達もそれに続いた。

クリス 「ではこれを持って下さい」

クリスはそう言ってハヤトに直径20?ぐらいの丸い水晶玉を渡し

た。

ハヤト達は今、中庭に来ていた。
なんでも自分達を打ち負かした者達がどれだけの力を秘めているか知りたいと言う理由で兵士も含め大勢の者達が見れるように中庭に移動したのである。

ハヤト 「これは？」

クリス 「どの属性を持っているか調べる為の物です、魔力に反応する鉱石で造られた物で、手に持つだけでその人の持つ属性によって発光する様になっています」

ハヤト 「ほう、どれどれ」

ハヤトはそう言ってクリスから水晶玉を受け取った。

周りにいる者達

「「「おおおおおおおう」「」」

クリス 「これは凄いですね」

ハヤトが水晶玉を手にとった瞬間に水晶玉から白銀の光が発した。

クリス 「光属性と闇属性を持つ者は極めて稀なんですよ、ハヤト様はどうやら光属性の魔力を持っている様うですね…ってえ？」

ハヤトが持っていた水晶玉が白銀から土色に変わった。

ハヤト 「なんだ？色が変わったぞ？」

クリス 「驚きました…どうやらハヤト様は土属性の魔力も備わっているようですね、もっとも先に反応した光属性の方が濃い様ですが」

ハヤト 「ふん、まあ何だって構わねえけどな…俺は強くなればそれでいい、ほら次はお前達だ」

そう言ってハヤトは水晶玉を持っている手をサクラ達に差し出した。

アキラ 「サクラからでいいよ」

サクラ 「そお？なら遠慮なく」

サクラがハヤトから水晶玉を受け取ると水晶玉が赤く光を発した。

クリス 「サクラさんは火属性の魔力を持っている様ですね…色が変わらない所を見るとどうやらそれ一つだけの様ですけど…」

サクラ 「何か納得いかないわね…なんでハヤトは2つなのに私は一つだけなのよ！」

ハヤト 「才能じゃね？」

サクラ 「ふん！」

ハヤト 「げぼふっ！？」

サクラの気に障る事を言ったハヤトにサクラの右パンチが鳩尾にクリティカルヒットした。

サクラ 「ほら、次はアキラの番よ？」

アキラ 「うん」

クリス 「……………（ハヤト様はあのままでいいんでしょうか？苦しそうに悶えているんですが…）」

ハヤトを無視してサクラから水晶玉を受け取ると水晶玉が青色の光を発した。

アキラ 「俺は水の魔力属性か」

クリス 「どうやらその様ですね…ってえ？」

アキラが持っている水晶玉が青色から水色↓赤色↓黄色↓緑色と言う順に変わっていった。

アキラ 「ちょっ！？何だこれ！？」

サクラ 「これってつまり…」

クリス 「こんな事って…」

ハヤト 「ん？どうしたよ？」

サクラのパンチから回復したハヤトは周りが騒がしい事に気が付きアキラの水晶玉を覗いた。

ハヤト 「なんじゃこりゃ！？」

アキラの水晶玉は依然、青色↓水色↓赤色↓黄色↓緑色の順に発光していた。

クリス 「私も初めて見ました…まさか5つの属性を持つ者が現れるなんて…」

アキラ 「え〜と、って事は…？」

クリス 「はい、アキラさんは、火雷風水氷の5つの魔力属性を持っています…」

クリスの言葉にサクラは凹み、ハヤトはアキラの背中を叩き称賛の言葉を送った。

サクラ 「なんで私だけ一つなのよ…」

ハヤト 「すげえじゃねえかアキラ！」

アキラ 「あははは…自分でもびつくりだよ…だからお願いだからそんな目で俺を睨まないでサクラ姉さん！！」

サクラに凄い目で睨まれたアキラはすぐさまサクラから距離を取った。

クリス 「え〜と、次に魔力量を測りたいんですけどいいですか？」

クリスが苦笑気味にそう言うとハヤト達は頷き水晶玉をクリスに返した。

アキラ 「魔力量ってどうやって測るんだ？」

クリス 「これを持ってみて下さい」

そう言ってクリスから六角柱型の水晶を手渡された。

アキラ 「これは？」

クリス 「これも魔力に反応する鉱石を削った物です、それに魔力を流し込めば先程と同じ様に光を発し、その光の色でどのくらいの魔力があるのか調べる事が出来ます」

アキラ 「えーと、悪いんだけどさあ俺達、魔力の流し方なんて知らないんだけど…」

アキラの言葉にハヤトとサクラは頷いた。

クリス 「何かをそれに流し込む感じをイメージしてみてください」

アキラ 「いや、もっと具体的に言っしてほしいんだけど、…」

アキラの言葉にクリスは何かを考える素振りをみせるが少しして何か思い付いたのか口を開いた。

クリス 「そうですねー、こうサワ〜って言うか、ザワ〜って言う感じを手から流し込む様イメージしていただけると…」

アキラ&ハヤト&サクラ

「「「余計解らんわ！！！」」」

クリスの説明の仕方に思わず三人がツツコムとクリスは凹んでしま

った。

つとその時…

ユーマ 「お前ら何やってんだ？」

アキラ&ハヤト&サクラ

「」「ユウマ!?!」「」

アキラ達が俺の存在に気づくと駆け寄ってきた。

アキラ 「もう身体は大丈夫なのか!?!」

ユーマ 「いや、まだ怠いんだが外が騒がしくてな…何をしているのか気になって見に来たんだ」

俺がそう言つとクリスが申し訳なさそうな顔をして近づいてきた。

…… 恐いなら近づいて来なくていいって言つただけだな…

クリス 「申し訳ありません…ハヤト様達が暇だとおっしゃるものですから、なら丁度よいと思ひまして魔力量と魔力属性を調べさせてもらっていた所です…」

ユーマ 「ふーん、魔力量って言うのは何となく解るけど、魔力属性って何だ？」

俺がそう言つとクリスが説明してくれた。

数分後…

クリス 「つと言うのが魔力属性です」

ユーマ 「成る程な…っでアキラ達は魔力の流し方を知らなくて困っている？」

アキラ 「まあ…そんな訳で…て言つかクリスさんの説明が解らないと言つか何と言つか…」

アキラの言葉にクリスがムツとした様に眉を寄せた。

クリス 「だって仕方ないじゃないですか、私達にとって魔法は産まれた時から身近にあるもので使えるのが当たり前になっているんですから行きなりそんな事を言われても困ります！」

ユーマ 「はあ、アキラ、自分が水晶を持っている右手に集中してみろ」

俺の言葉にアキラがよく解らないと言った表情をした。

アキラ 「集中って…」

ユーマ 「気って言うのが俺達の世界にあるだろ？多分それと同じ要領だ…身体中の全神経を右手に集中させてみる」

俺がそう言つと集中する為かアキラが目を閉じた。

ユーマ 「右手に全神経を集中させたらそのまま意識を持っている水晶に移せ」

アキラ 「……………」

するとアキラが持っている水晶が紅く発光した。

周りにいる者達

「『なっ!?!』」

クリス 「これ程までに魔力が高いなんて…」

水晶が紅く光った瞬間、クリスを始め周りにいる者達もざわめきだした。

アキラ 「……これでもいいのか？」

ユーマ 「多分上出来だと思うが、クリス…どうなんだ？」

俺がそう聞くとクリスは驚愕の表情を浮かべながら口を開いた。

クリス 「100000エーテルなんていう魔力量を持つ者など聞いた事ありません…」

ユーマ&ハヤト&アキラ&サクラ

「『エーテル?』」

クリス 「魔力量を表す単位の事です、その水晶は魔力の多さによってそれぞれ、白 黄 青 緑 赤 紫 黒の六色に光ります、白色で光る魔力量は100000エーテルで一般的な人の魔力量がこれです、黄色で光る魔力量は500000エーテルで、大体訓練された兵士達がこのぐらいです、青色に光る魔力量は1000000エーテルで、魔導士一人分ぐらいです、緑

色に光るのが50000～100000エーテルで此処からは古い文献にのっているだけで実在した者はいないと聞いています、そして赤色に光るのに必要な魔力量は100000～500000エーテルが必要とされています、紫色に光るのに必要な魔力量は500000～1000000エーテルが必要とされていて、最後に黒色ですが1000000～不明とされています」

ユーマ 「不明とはどういう意味だ？それと実在した者がいないなら、どうやって水晶が光る色を調べる事ができたんだ？」

クリス 「遙か太古の時代には魔力が吹き出る泉が存在したそうです、昔の人達はその泉を使ってこの水晶がどこまで魔力を測れるか実験をしたそうです、結果黒色にまで光らせる事ができました、しかしそれ以降はどれだけ魔力を流し込めても黒より先の色を現す事ができなかったらしいです、泉はその実験の最中に枯れてしまい実験を続ける事はできなくなったので黒色は何エーテルまでなのかは解らず仕舞いなんです」

ユーマ 「成る程なあ」

クリスがそこまで言い終わると俺はアキラに視線を向けた。

アキラ 「なっ何だよその目は…って何で皆俺を見てんだよ!？」

気が付くとハヤト達も同じ様にアキラを見ていた。

サクラ 「それやゝねえ…」

ハヤト 「馬鹿な俺でもお前がどれだけ凄いかは解るぜ…」

ユーマ 「ふっ…アキラ、まるで珍獣扱いだな？」

俺達三人が口々にそう言うのとアキラが声を上げた。

アキラ 「おいユーマ！鼻で笑って珍獣とか言うな！それに俺だけって事はないって、ほらあの糞神だって言ってたろ？お前達には強大な魔力が宿ってるって！お ま え た ち にはって！」

ユーマ 「何故二回言う？」

アキラの言葉にクリス以外の城の者達がよく解らないと言った風顔をしていた。

アキラ 「いいから取り敢えずお前らも測ってみろ！」

アキラはそう言って近くにいたサクラに手渡した。

サクラ 「言っておくけど私は魔力なんてあまり無いと思うけど？
……属性だって一つだけだし…」

ユーマ&ハヤト&アキラ

「「「（まだ気にしてたのか！？）」「」」

つとその時…

サクラが持つてる水晶が光りを発した。

ユーマ&ハヤト&アキラ&クリス

「「「……………」」」

サクラ 「……………あれ？」

紫色に…

ユーマ 「クリス…」

クリス 「はい…何ですか…？」

ユーマ 「赤色は何エーテルと言ったか？」

クリス 「100000から500000エーテルです…」

ユーマ 「……………では紫色は？」

クリス 「500000から1000000エーテル…のはずですけど…」

ユーマ 「……………」

沈黙…

沈黙が今この場を支配していた。

サクラ 「つつ次はハヤトが測ってみなさいよ！」

沈黙を破ったサクラはその場から逃げる様にハヤトに水晶を手渡した。

ハヤト 「さうと、俺は一体どのくらいなんだろうな！」

クリス 「もうハヤト様がどれだけ魔力があっても私は驚きません
……」

すると水晶が紫色の光を発した。

ハヤト 「お！どうやら俺もサクラと同じぐらいの魔力があるらしいな！」

クリス 「歴史を塗り替える者が三人も現れるなんて今日は凄い日ですね」

アキラ 「ん？ユーマは測らないのか？」

ユーマ 「いや、せっかくだから俺も測らせてもらおうか」

クリス 「ではこれを」

俺はクリスから水晶玉を受け取った。

すると、まるで水晶玉が闇に飲み込まれるかの如く暗黒の光りを発した。

その瞬間周りにいた兵士達や他の者達からざわめきが起った。

ユーマ 「……………」

クリス 「ユーマさんは闇属性の魔力を持っている様ですね、他の色に光らない所を見るとそれ一つだけの様ですけど……」

アキラ 「確か、闇属性も光属性と同じ様に珍しい魔力なんだっけ？」

クリス 「はい…」

ハヤト 「すげえじゃねえか！」

サクラ 「どうしたのクリス？」

クリスが少し暗い顔をしている事に気づいたサクラはクリスに喋りかけた。

クリス 「いえ、何でもありません…さあ次は魔力量を測りましょうか」

クリスはそう言って無理矢理笑みを浮かべた。

俺達はその無理矢理な笑顔に気づいていたが、余り追及するのはよくないと思ったので俺達は何も言わなかった。

アキラ 「ユウマはどのぐらいの魔力があるんだろうな」

サクラ 「さあ、私達と同じか、もしかしたらそれ以上かもしれないわね」

クリス 「ではユーマさん、次はこの水晶を持ってみてください」

ユーマ 「ああ」

俺は小さくそう返事をし、クリスから水晶を受け取り、水晶玉をクリスに渡した。

ユーマ 「さてと魔力を流してみるか」

俺はそう言って水晶に魔力を流した。

すると…

クリス 「……………え？」

ハヤト&サクラ&アキラ

「「「なっ！？」」」

俺が持っている水晶が白色の光りを発した。

サクラ 「これって何かの間違いじゃないの！？」

ハヤト 「おいユウマ！もう一回やってみろ！」

ユウマ 「いや…さっきから魔力を流しているが水晶の色が変わる気配はない、きっとこれが俺の魔力量なんだろう」

俺はそう言って水晶をクリスに返した。

アキラ 「でもおかしいよ、あの糞神は俺達には強大な魔力が宿ってるって言ってたんだよ？って事はユウマにも俺達と同じぐらいの魔力があるはずなのに…」

ユウマ 「まあ魔力が少ないだけで魔法が使えないって訳じゃないんだ、使い所さえ間違えなければ十分に役にたつさ」

アキラの言葉に苦笑しながら俺はそう言った。

つとそこで…

グラン 「どうも城の中が静かだと思ったら、お前達は此処で一体何をしているのだ？」

周りにいる者達

「……へ……い……か？」

グランの登場に周りにいた者達が顔を真っ青にして後ろを振り向いた。

グラン 「わしが国務に励んでいる中お前達は仕事もしないで何をしているのだ？」

グランの背中から炎みたいなものが見えているのは気の所為だろうか？

グラン 「しかも国務大臣まで一緒とはな、わしに仕事を押し付けるとはいい度胸だな？」

国務大臣 「そつその……申し訳ありません陛下！」

国務大臣と呼ばれた中年の男はすぐさま土下座をしてグランに謝るとそれに続き兵士達もグランに平伏した。

兵士達や使用人達

「……申し訳ありません」

グラン 「はあーもうよい、各自持ち場に戻るがよい」

大勢の者達

「……はっ……！！！！」

グランの言葉に皆は一礼して持ち場へ駆けて行った。

グラン 「たくあ奴らときたらこんな所で油を売っておって…」

グランはそう言っただけの方を向いた。

グラン 「さてと、夕方には君達の歓迎会をやるうと思っっている、クリスと一緒に衣裳室から服を選んで来なさい」

クリス 「魔物達の討伐はどうするのですか？」

グラン 「それは明日でもいいだろう、今日はいろいろあってお前も疲れただろ？しつかりと休みなさい」

クリス 「はい、ありがとうございますお父様」

グラン 「では私は失礼する、まだ仕事が残っているのですね」

その言葉を最後にグランは城内へと歩いて行った。

アキラ 「やったあ！歓迎会だってよユウマ！」

ユーマ 「そうだな」

ハヤト 「よっしゃあ！久しぶりに酒が飲めるぜ！」

サクラ 「あんたはまだ未成年でしょ！」

ユーマ 「しかしどうやって俺達の事を説明するか…此処とは違う世界から来たと言っても信じてもらえるか解らないし混乱する者も

出るかもしれない」

俺の言葉にアキラとサクラが頷いた。

「俺達の正体は隠しておいたほうがいいかな……」

「それに注目を浴びるのは好きじゃないし」

「決まりだな……」

つとそこでクリスが話しかけてきた。

クリス 「あゝ」

ユーマ&サクラ&アキラ

ん?

クリス 「話し合っているのは結構ですけど…ハヤト様はもう先に
行ってしまってますけど…」

クリスは苦笑気味にそう行つて100メートルぐらい先にいるハヤトを指差した。

[illegible]

ユーマ 「あいつは……」

「あの馬鹿……」

「ははは…ハヤトラしいね…」

腕を振って俺達を呼ぶハヤトに俺とサクラは脱力気味に眩き、アキラは苦笑いを浮かべた。

クリス 「さてと此処が衣裳室になります、ハヤト様、ユーマさん、アキラさんは左側の部屋へ入って下さい、私とサクラさんは右側の部屋へ入ります」

そう言ってクリスはサクラの手を引いて部屋へと入っていった。

アキラ 「俺達も入るか」

アキラの言葉に俺達も部屋へと入った。

アキラ 「凄い数の服だな…」

ユーマ 「取り敢えず着替えるか…」

俺はそう言っただけで一番近くにあった黒いタキシードらしき服を手にとった。

ハヤト 「まともな服があればいいけどな」

ハヤトはそう言って奥の方へ歩いて行った。

アキラ 「うん、余りいい服がないな、ユウマその服どこにあった？」

ユウマ 「ん？タキシードならこっちに後4着あるが？」

アキラ 「俺もその服にするわ」

アキラはそう言ってタキシードに手を伸ばした。

ハヤト 「おっ！アキラもタキシードにするのか！」

アキラ 「ん？ああハヤト…か…？」

そう言って出て来たのは純白のタキシードに身を包んだハヤトだった。

うん、もの凄く似合ってる…

ユーマ 「何だその格好は？」

ハヤト 「派手でいいだろ？」

ユーマ 「確かに派手だが、少し派手過ぎないか？」

ハヤト 「そうかあ？ちょうどいいと思うけどな」

アキラ 「まあハヤトがそれでいいと言うならいいんじゃないかな」

ハヤト 「ほら、さつさと着替えて部屋から出おっぜ！」

アキラ 「解ったよ、ちよつと待つてて」

そう言つてアキラは服を脱ぎ黒いタキシードに着替え始めた。

アキラ 「よし、じゃあ行こうか？」

ハヤト 「おう！早く酒を飲みに行こうぜ！」

ユーマ 「だからお前はまだ未成年だろ……」

こうして俺達は部屋から出て行つた。

ハヤト 「……………遅い……………遅すぎる！一体あいつらは何やつてんだよ！」

ユーマ 「確かに少し遅いな……」

部屋から出た俺達はまだ来ていないサクラ達を待つていたのだが、そのサクラ達は2時間経つても出てこないでいた。

ハヤト 「はあゝ？少しだあ？何処が少しだよ！2時間だぞ！？何でこんなに待たされるんだよ！？」

アキラ 「甘いよハヤト…俺なんて前にサクラの買い物に付き合わ

された時なんて4時間も家に帰れなかつたんだから、更に荷物まで持たされるし……」

そう言うアキラの目は何処か遠い所を見る様な目をしていた。

ハヤト 「やってられるか！俺はもういくぞ！」

ユーマ 「そう言うなハヤト、もう少しだけサクラ達を待ってみよう……」
う……どっちにしるサクラ達が来なければ俺達の歓迎会は始まらないだろっしな……」

ハヤト 「うっ……畜生！早くしやがれええええええ！！！」

俺の言葉にハヤトは低く呻き、イライラをぶちまける様に大声を上げた。

そんな中サクラ達はと言うと……

サクラ
side

数時間前：

「いろんな服があるわね」

クリスに手を引かれ入ったサクラは余りの服の多さに少しだけ驚いた。

クリス 「ささ、好きな服を選んで下さい♪私はあちらの服を見てください♪」

クリスそう言っただけで奥の方に歩いて行った。

サクラ 「にしてもこれだけの服があるとどれにするか迷うわね……って全部ドレスしかないじゃない！？私ドレス何て着た事ないわよ！？」

サクラは地面に座り込み苦悩の表情を浮かべたのだった……

それから約一時間後……

クリス 「サクラさん！どれにするか決めましたか？……ってどうしたんですか！？そんな所で蹲まって！？」

自分が着るドレスを選んだクリスはサクラの様子を見に来たのだが下に蹲っているサクラを目にし駆け寄った。

サクラ 「どしたもこうしたも、私は今までドレス何て着た事がないのよ！」

クリス 「……………もしかして、ずっとそこで蹲っていたんですか？

呼んでくれれば選ぶのを手伝ってあげましたのに」

サクラ 「悩み過ぎてそこまで頭が回らなかったわよ」

そんなサクラにクリスは苦笑を浮かべた。

クリス 「仕方ないですね、私もドレス選び手伝います」

サクラ 「お願いするわ、ん？その手に持つてるのって…」

クリスの手には水色のドレスが握られていた。

クリス 「ああ私水色が好きなんですよ」

サクラ 「クリスに似合いそうないいドレスね」

クリス 「ありがとうございます」

それから二人はドレスを選び始めた。

クリス 「これなんてどうですか？」

サクラ 「何か微妙ね…」

クリス 「そうですか…」

10分経過…

サクラ 「ん？これは…」

クリス 「それも何か微妙ですね…」

サクラ 「そうね…」

30分経過…

サクラ 「これは…駄目ね…」

1時間経過…

クリス 「あっ！これ何てどうですか？」

そう言ってクリスは赤いドレスを持って来た。

サクラ 「ちょっと派手じゃない？」

クリス 「そんな事ないですよ、いいから着てみて下さい」

サクラ 「解ったわよ」

サクラはそう言っでクリスからドレスを受け取り奥の方へ歩いて行った。

クリス 「女の子同士なんですからここで着替えてもいいのに」

数分後：

クリス 「お待たせしました♪そのドレスに合う物が見つからなくて少し遅くなってしまいました、サクラさん少し後ろを向いて下さい♪」

クリスにそう言われサクラは後ろを向いた。

サクラ 「何を持ってきたの？」

クリス 「ちよつとした首飾りですよ♪」

サクラ 「首飾り！？いいわよそんなの！壊したりしたら大変だし」

クリス 「ああ！動かないください！それに大丈夫ですよ、そんなに高い物でもないですし、サクラさんにならきつとこれが似合うと思って持ってきたんですから、付けてくれると私は嬉しいです♪」

サクラ 「でっでも！」

クリス 「はい！付けましたよ、こちらを向いて見せて下さい♪」

サクラがまだ何かを言おうとしたがそれよりも早くクリスが口を開きサクラの言葉を遮った。

サクラは何を言っても無駄だと悟ったのかもう何も言わずクリスの方を向いた。

サクラ 「……………」

クリス 「やっぱり淒く似合ってますよサクラさん」

サクラ 「ありがとう、クリス」

サクラの胸には銀色の翼を生やした天使を象ったネックレスが光りを反射して輝いていた。

クリス 「さてと…私も着替えると思いますが、サクラさんの支度に夢中で自分の支度をするのを忘れていました、サクラさん少しだけ待っていて下さいね？」

そう言つてクリスは服を脱ぎ、ドレスに着替え始めた。

ユーマ side

ハヤトを宥めてから数分が経過したが今だにサクラ達は出て来ない…

ユーマ 「頼むから早くしてくれ…」

俺がそう呟いた時…

クリス 「お待たせしました」

サクラ 「……………」

ハヤト 「おせえ！一体今まで何してやがつ…た…？」

扉が開き中からサクラ達が出て来るとハヤトは怒鳴り出したがサク

ラ達の姿を見た途端に固まってしまった。

アキラ 「へえ、サクラもクリスも似合ってるじゃん」

ユーマ 「そうだな、二人共凄く綺麗だ」

クリス 「ありがとうございます」

サクラ 「ありがとう、アキラにユーマ」

ユーマ 「っでお前はいつまで固まっている気だ？ハヤト」

ハヤト 「あっ…ああ…ユウマか…」

俺がハヤトに喋り掛けるとハヤトは気が付いたのかこちらを向いた。

クリス 「ハヤト様、私達のこの格好、おかしくありませんか？
／／／／／／／／」

クリスが少し頬を紅く染めてハヤトにそう言った。

ハヤト 「ん？ああ別にいいと思いまうぜ？」

サクラ 「……………（別にいいって…ハヤトは本当に女心が解っていないわね…後で、お話し、するしかないわね…肉体言語で！）」

ハヤトがそう言った瞬間サクラから黒いオーラの様なものが見えた様な気がしたが…多分気の所為なので余り考えないようにしよう…

クリス 「あっあの、その、ありがとうございます！／／／／／／／／

／／
」

ユーマ 「（ん？クリスのあの反応はもしかして…）」

俺はサクラに近付き話し掛けた。

ユーマ 「おいサクラ、クリスのあの反応はもしかして…」

サクラ 「あ、ユーマも気づいた？」

俺がサクラに小声で話し掛けると、それに気づいたサクラも小声で話し返してきた。

ユーマ 「じゃあやつぱり…」

サクラ 「そうよ、何故だかは解らないけどハヤトに恋をしちゃったらしわ」

ユーマ 「ハヤトに恋するなんてな…ハヤトはかなりの鈍感だから難易度は高いぞ？」

サクラ 「それは私が何とかするわよ、私は恋する乙女の味方なんだから」

ユーマ 「……………」

サクラと小声で話し合っているとクリスがこちらに近付き話し掛けてきた。

クリス 「あの、そろそろ時間ですので行きませんか？」

サクラ 「ん？ああごめんごめん、そうねそろそろ行きましょーか」

ユーマ 「そうだな……」

ハヤト 「よっしょあー！やっと酒が飲めるぜ！」

アキラ 「だからハヤトは……ハア……もういいや……」

こうして俺達はパーティー会場に向かった。

グラン 「もう知っていると思うが今日からこの城に住む者達を紹介する」

グランのその言葉で俺達は前に出た。

アキラ 「えーと今日からこの城に住まわせてもらうアキラ・シミズです、よろしく願います」

女性達 「「きゃあああああ……！！あの子凄く可愛い！」

アキラが自己紹介すると女達から悲鳴に近い歓声が響き渡った。

アキラ 「ユーマ……」

ユーマ 「……………」

俺は何も言わずにアキラの肩に手を置いた。

サクラ 「アキラの双子の姉のサクラ・シミズです、皆さんよろしく願います」

男達 「おおおおおおお！！！」

サクラが自己紹介すると今度は男達から喜びの雄叫びが上がった。

ユーマ 「ユウマ・ツキミヤだ、遠くの地から来たためにこの地の事はよく知らないがよろしく頼む」

俺がそう言つと拍手が起こった。

ハヤト 「俺の名前はハヤト・オガワだ！言いかよく聞け！腕に自信がある奴は俺と闘え！俺はいつでも待っててやる！解ったか！」

ユーマ&アキラ

「あの馬鹿……」

サクラ 「……………」

ハヤトがそんな事を言った瞬間にサクラが無言で近いた。

ハヤト 「ん？」

サクラ 「あんたは一体何言つてんの！」

ハヤト 「うお！？あつ危ねえな！一体何しやがるサクラ！」

サクラの踵落しを躲したハヤトはサクラに怒鳴り返した。

サクラ 「それはこっちの台詞よ！喧嘩オタクも大概にしなさいよ！」

ハヤト 「誰が喧嘩オタクだ！俺はただ純粹に強い奴と闘いたいだけだ！」

サクラ 「それが喧嘩オタクだって言ってるのよ！少しは自重しなさいこの馬鹿！」

ハヤト 「ばっ！？てめえ…誰が馬鹿だ！この鉄板胸筋娘！」

サクラ 「誰の胸が鉄板で胸筋ですって！」

ハヤト 「はっ！誰がてめえの胸何て言っただよ？まあ自覚があるのはいい事だけだな！」

サクラ 「何ですって！」

アキラ 「はい、そこまで！」

ユーマ 「言い争いはその辺にしておけ…」

このままでは永遠に続き兼ねないので俺とアキラはハヤトとサクラの言い争いを止めに入った。

ハヤト 「ちっ！解ったよ」

サクラ 「解ったわよ……」

つとそこで……

グラン 「では四人の中から一人、歓迎開を始める言葉を言っ
てほしいのだが」

ユーマ 「……………ハヤトだな」

アキラ 「ハヤトが適任だね……」

サクラ 「今度はちゃんとやりなさいよハヤト」

ハヤト 「何で俺だよ！？……………まあいいや、解った！俺がバシ
ツと決めてやるぜ！」

そう言っつてハヤトは前に出て大きく息を吸った。

ハヤト 「いいかてめえらよく聞け！」

ハヤトがそう言っつた瞬間に皆の視線がハヤトに集まった。

ハヤト 「俺達の歓迎会だか何だか知らねえが！んな物は関係ねえ
！今日はとことん無礼講だ！身分何かお構い無しに飲んで騒いで盛
り上げろ！解ったか！」

大勢の者達

「おおおおおおおおお！！！！」

ハヤトが喋り終わると周りから男女問わずに歓声が響き渡った。

ユーマ 「流石ハヤトだな…」

アキラ 「だね、学校の文化祭とかもこうやって場を盛り上げてたし」

サクラ 「ハヤトのこう言う所は正直に凄いと思うわ」

こうして俺達の歓迎会は始まった。

ハヤト 「おいもう終わりかよ!」

兵士(男) 「もう飲めな…い…(がく!)」

開始10分でビールらしき物を18杯飲んだ所で兵士の一人が倒れた。

どうやらハヤトは兵士達と飲み比べをしているらしい…

アキラ 「あのゝそろそろ放してくれませんか?てかその前に離れてほしいんですけど…」

使用人A(女) 「そんな事を言わないで、ほらあゝん」

使用人B(女) 「あ、ずるい私も!ほらアキラくん、あゝん」

アキラ 「いやだからマジ離れ…誰か助けてくれ！」

アキラの方は女の人達に捕まっていた。

ユーマ 「……………」

サクラ 「何か大変な事になってるわね…」

ユーマ 「サクラか…」

声がしたので振り返ってみるとそこにはサクラがいた。

サクラ 「何かこう言つて暇よね？」

ユーマ 「そうだな…だが残念ながら暇なのは俺だけの様だけだな…」

サクラ 「どうして？」

サクラは解らなそうに首を傾げた。

ユーマ 「後ろを振り返って見るサクラ…」

俺の言葉にサクラが後ろを振り向くと…

兵士A（変態） 「ハアハアサクラたんサクラたん…」

兵士B（変態） 「ペツタンコ萌え…ハアハア」

兵士C（変態） 「小さくてもの凄く可愛いんだな…」

サクラ 「……………（ゾクッ!？）」

サクラはまるでロボットの様に俺の方に首を戻した…

サクラ 「ユウマ…」

ユーマ 「……………生きて帰って来いよサクラ」

サクラ 「……………（ダッ!）」

俺のその言葉を合図にサクラは脱兎の如く駆け出した。

ユーマ 「はあゝ、少し外の空気でも吸ってくるか…」

俺はホールからベランダへと向かって歩いて行った。

ユーマ 「異世界に来てもこの夜空は同じだな…」

俺は夜空に輝く星々を見ながら小さくそう呟いた。

月を見てると、あいつ、を思い出す…

闇を照らす優しい光りの様な存在だった俺の親友…

ユーマ 「お前は俺を恨んでいるか?……………大地」

俺の眩きはその時吹いた風と共に消えていった。

クリス 「何してるんですか？ユーマさん」

ユーマ 「クリスか…」

俺は後ろを振り向いてクリスを見た。

ユーマ 「別に何もしていないさ、ただ考え事をしてただけだ」

クリス 「一体何を考えていたんですか？」

クリスが笑みを浮かべて近いてきた。

ユーマ 「何でもいいだろ？それよりも…」

俺はそこで言葉を区切り少しだけ目を険しくさせてクリスを見た。

ユーマ 「何故俺に近づく？俺が怖いなら近づいて来なくていいと言っただろ？」

俺の言葉にクリスは笑みを消して俺を見つめた。

クリス 「ええ、正直まだ貴方が恐いです…」

ユーマ 「なら…」

クリス 「だけど私は貴方ともっとお話しがしたい、貴方の事を知りたいんです！」

クリスの言葉に俺は瞳を見開いた。

クリスの言葉はまだ続く…

クリス 「今の私はまだ貴方を恐がつてゐる、だけどそれは私が貴方の事を何も知らないだけなんです、だから教えて下さい！貴方がどんな人で、どんな良い所があるのかを！私は貴方ともつというんなお話しているんな事をして貴方の事を知っていきますから貴方も貴方の事を少しでも教えて下さい！」

ユーマ 「……………」

俺は夜空を見上げて考えた。

俺は化け物だ…

狂気に飲まれたらクリスを殺してしまうかもしれない…

では何故俺はハヤト達の傍にいる？

そんな事は決まってる…

あいつらを信じているからだ…

狂気に飲まれたとしてもあいつらが俺をまた救ってくれると…

俺はハヤトが言った言葉を思い返してみた。

狂気に飲まれたとしても俺がお前をぶん殴つてもとに戻してやるよ！

アキラとサクラも同じ様な事を言っていたっけ…

少し試してみるか…

俺はクリスを見て口を開いた。

ユーマ 「クリス…」

クリス 「はい、何ですか？」

ユーマ 「俺が狂気に飲まれればお前を殺してしまうかもしれないぞ？それでもいいのか？」

クリス 「貴方がもしも狂気に飲まれってしまったら私が正気に戻してあげますよ、それに…私は強いですから簡単には殺されません」

クリスはイタズラっぽく笑みを浮かべてそう言った。

ユーマ 「ふっ…」

大体想像はついていたがまさかハヤト達と同じ事を言うなんてな…

面白い…

クリスのその言葉を信じてみるか…

ユーマ 「いいだろう…その言葉信じさせてもらっ」

俺はクリスの慌て振りに苦笑を浮かべた。

クリスは恥ずかしいのか俯きながらそう言った。

ユーマ 「明白過ぎるんだよお前の反応は、感が鋭い奴ならは直ぐに気づくぞ？現にサクラも気づいてるしな…」

「ええええええええええ！？！？！！！！」

クリスが顔を真つ赤に染めながら叫び声を上げた。

ユーマ 「安心しろ、ハヤトに言うつもりは無いからな…それにこ
う言うのは自分で言う物だろ？俺やサクラも応援してるからな、頑
張れよ？」

クリス「はっはい！頑張ります！／／／／／／／／／／」

クリスは口をパクパクさせていたが俺がそう言くとクリスは赤くなりながらも大きく返事を返した。

ユーマ 「それじゃあ戻るか？」

「はい！」

そう言うって俺達はホールへと歩いて行った。

ハヤト 「おっしゃあ！これで50人抜きだ！」

兵士A 「そ…んな…隊長まで…」

隊長 「む…ね…ん…（がくっ！）」

兵士B 「ば…かな…？あの隊長を倒すだ…と…？」

ハヤト 「俺に飲み比べで勝とうなんて100万年早いんだよ！」

ハヤトの周りにはまた一人と屍（？）が積み重ねられていった…

アキラ 「ちよっ！？何で俺のズボンに手を掛けるんですか！？」

使用人A（女） 「ふふふ、お姉さんがアキラくんを大人にしてあげる♪」

使用人B（女） 「あら♪アキラくんの初めては私の物よ♪」

使用人C 「何言ってるのよ、アキラくんは私が愛してあげるんだから♪」

アキラ 「ちよっ！？お願いだからズボン取らないで下さい！って…何処触ってるんですか！？」

使用人（女）達

「ハハ何処って、アキラくんの（ピーー！！！！）だけど？」

アキラ 「誰かこの人達を止めてくれええええええ！！！」

アキラは自分の身を守るためにいろんな意味で戦っていた…

サクラ 「あんた達いい加減しつこいわよ！？」

兵士A（変態） 「サクラたんサクラたん…ハアハア」

兵士B（変態） 「ハアハア…走るサクラちゃんも可愛いんだな」

兵士C（変態） 「サクラた〜ん！僕と結婚してほしいんだな〜！」

サクラ 「絶対嫌！生理的に無理！お願いだからこっちに来ないで
！」

兵士（変態）達

「ハハハアハア…サクラたんサクラたんサクラたん」

サクラ 「誰か助けてえええええええ！！！」

流石双子、アキラと同じ様な事になっている…

クリス 「……………」

ユーマ 「何だこの混沌^{カオス}は…」

ホールに帰ってきた俺達が目にした物は何か大変な事になっている
兵士達と俺の友達の姿だった。

クリス 「どうしたらいいんでしょうユーマさん…」

ユーマ 「俺に聞かないでくれ…」

俺は疲れた様にそう言った。

それから数時間後…

俺達の歓迎会は幕を閉じて俺達は部屋へと向かった。

ユーマ 「重い…」

サクラ 「飲みつぶれて眠るなんて、ハヤトはほんとどうしようも
ないわね…」

俺はハヤトをおぶりながら部屋へと歩いていた。

後ろではサクラとクリスがハヤトを支えてくれている。

クリス 「それよりもアキラさんは何処へ行っただんでしょう…」

クリスがそんな事を言った時…

アキラ 「あー！！やっと見つけた！」

ユーマ 「お、アキラがきた…ぞ…？」

サクラ 「アキラ！あんた一体何処で何して…は？」

クリス 「……………」

アキラは俺達を見つけるとこちらに向かって走って来た。

パンツ一丁で…

サクラ 「ちょっとアキラ！？あんたパンツ一丁で何してるの!？」

ユーマ 「アキラ…目覚めたのか？」

クリス 「……………変態ですアキラさん……………」
／
／

アキラ 「違う！あの女共から抜きだすにはズボンを犠牲に捧げる
しかなかったんだよ！服は逃げ出す時に掴まれて、脱ぐしか逃げら
れなかったんだよ！」

アキラは必死な顔で俺達に弁明した。

ユーマ 「よく逃げ切れたな」

サクラ 「あんたも苦労してるのね…」

クリス 「すいませんでしたアキラさん、あの人達にはよく言っておきます」

アキラ 「そうして下さい…」

そう言っただけ俺達はまた部屋へと向かった。

ユーマ 「ふう〜やっと着いたか…って何だこの馬鹿広い部屋は？」

アキラ 「ハヤトだけじゃないよ、俺達の部屋も同じぐらいの広さだったよ」

いつの間にか寝間着に着替えたアキラがそんな事を言った…

…………マジでいつ着替えた？

クリス 「ハヤト様達はこの世界を救って下さる勇者様達ですから、このぐらいの部屋は当たり前かと思ひまして」

ユーマ 「まだ何もしてないけどな…」

俺はそう言いながらハヤトをベットに降ろした。

アキラ 「俺達ももう寝るとしようか？」

サクラ 「そうね…私も今日はもう疲れたから早く寝たいわ」

ユーマ 「じゃあ今日はもう寝るとしよう…」

クリス 「皆さんお休みなさい」

そう言っただけ俺達は各自部屋へと戻って行った。

ユーマ 「ああそうだクリス」

アキラとサクラが部屋へ入るのを見計らって俺はクリスに呼び掛けた。

クリス 「何ですか？」

ユーマ 「明日魔物を狩りに行くと言っただけだったか？」

クリス 「そうですけど、それが何か？」

ユーマ 「お願いがあるんだ…明日魔物の討伐に俺も同行させてほしい」

クリス 「…………理由を聞いても？」

ユーマ 「異世界に来たからには魔物と戦闘する機会もあるはずだ…だから魔物との戦いに慣れていこうと思っただけ」

クリス 「…………ハヤト様達はいいいんですか？」

ユーマ 「ああ…魔物がどれだけ強いかわからないからな、俺が戦ってみて平気そうなら次からはハヤト達を連れていって魔物との戦闘に慣れさせようと思ってる」

俺がそう言つとクリスは笑みを浮かべた。

クリス 「本当にハヤト様達の事が大切なんですね」

ユーマ 「まあな、俺はあいつらに救われた…だから今度は俺があいつらを守ると誓ったんだ」

クリス 「誰に誓ったんですか？」

ユーマ 「誰でもない…ただ俺の心に誓ったんだ」

クリス 「ふふ、貴方の『心器』（シンキ）はさぞかし強いんですね」

ユーマ 「しんき？……何だそれは？」

クリス 「今日はもう遅いので心器については明日説明します」

ユーマ 「そうか…じゃあお休みクリス」

クリス 「はい、お休みなさいユーマさん」

こうして俺達の長く騒がしい一日は終わりを告げた。

そして明日は…

そして勇者の新たな生活（後書き）

作者 「久しぶりの本編はどうでしたか？何か感想や思う所がありましたら言って下さい、さてと今回の後書きは前に言っていた通りキャラ紹介をしたいと思います、一人だと大変なので助手を連れて来ました、おゝい！もう来ていいぞ？」

アキラ 「何が助手だよ、幅強制的に人の意見完全無視で連れて来た癖に！」

作者 「まあそう言うなってほら始めようか？」

アキラ 「……………解ったよ」

作者 「じゃあ先ずはユーマの紹介からするか」

月宮 ツキミヤ・ユーマ
優魔

クリス達がいる世界ではユーマ・ツキミヤと名乗っている。
内に秘める狂気が原因で鬼の一族として忌み嫌われ続けてきた。
ハヤト達とは中学の頃に出会い、それ以降からの付き合いになっている

ユーマにとっては自分を救ってくれた掛け替えのない存在でハヤト達が傷付く事を何よりも嫌う

身長 164cm

体重 50Kg

好きな事・物

ゲーム・読書・昼寝

嫌いな事・物

自分・友達が傷付く事など…

作者 「まあこんな所かな」

アキラ 「どうしてユウマは俺達の事をこんなにも大切に思ってくれてるんだろう？」

作者 「それは後々解るから次の紹介をしようか？」

アキラ 「次はハヤトだね」

小川 隼人
オガワ・ハヤト

クリス達がいる世界ではハヤト・オガワと名乗っている。

アキラ達とは園児からの付き合いで所謂幼なじみと言うやつである。
力に以上な程の執着心を持っていて、いつも喧嘩ばかりしている。

身長 176 cm

体重 58 Kg

好きな事・物

喧嘩・強い奴・祭り

嫌いな事・物

勉強・正義ぶった奴

作者 「ハヤトの紹介もこんな所かな」

アキラ 「ほんとにハヤトはいつも喧嘩ばかりして、巻き込まれる
こっちの身にもなってほしいよ」

作者 「ほらそんな顔してないで次いくぞ？」

アキラ 「次はサクラだね」

清水 桜 シミズ・サクラ

クリス達がいる世界ではサクラ・シミズと名乗っている。
アキラとは双子の姉でハヤト程ではないが、強くなりたいと思って

いる。

身長 148?

体重 「言ったら殺す!」

好きな事・物

音楽・読書など…

嫌いな事・物

勉強・自分の事しか考えない奴・弱い者イジメ・自分の大切なものを傷付け奴など…

アキラ 「サクラの紹介もこんな所かな」

作者 「体重の所にいるはずのないサクラの声がした様な…」

アキラ 「気の所為じゃない?」

作者 「ならいいけどな…」

アキラ 「次はいよいよ俺の紹介だね」

清水 彰
シミズ・アキラ

クリスがいる世界ではアキラ・シミズと名乗っている。

サクラとは双子の弟で、ハヤトとサクラに、ユーマと一緒に振り回される事がよくある。

身長 147?

体重 45kg

好きな事・物

ゲーム・読書など…

嫌いな事・物

勉強・弱い自分・弱い者イジメする奴・自分の事しか考えない奴など…

アキラ 「俺の紹介もこんな所かな」

作者 「双子だと此処まで似るんだな」

アキラ 「まあ過去にいろいろあったからね…」

作者 「ネタばれになるから言うなよ？」

アキラ 「言わないよ、って言うか言いたくないし」

作者 「ならいいや、さてと…」

アキラ 「次はクリスの紹介だっけ？」

作者 「いや、クリスの紹介は次回の後書きでやるよ」

アキラ 「今日じゃないの？」

作者 「ちよつといろいろありましてね……」

アキラ 「ふう〜ん、じゃあ今日はもう終わり？」

作者 「まあそう言う事」

アキラ 「じゃあ締めるか」

作者 「次回の投稿もいつになるか解りませんが、止める事はないのでどうか気長に温かい目で見守って下さい」

作者&アキラ

「「それでは皆さんまた次回まで〜」」

ブッ……………

そして魔物の討伐へ（前書き）

皆さん久しぶりです！

相変わらず投稿するのが遅い死神です！

何度も言いますが、やめた訳じゃないですからね！？

ちゃんと少しずつですが書いてるのでその所よろしくです
では本篇をどうぞ！

そして魔物の討伐へ

霧が掛かった大きな湖に沈む事なく一人の男が佇んでいた。

『何だ？また来たのか？』

ユーマ 「好きで来た訳じゃないさ…」

霧の向こうから俺と同じ姿をした奴がこちらに歩いてきた。

『それは残念だ』

そう言つて俺の姿をした何かは口元を歪めた。

ユーマ 「（気味の悪い奴…）」

『そいつは悪かったな』

ユーマ 「心を読んだか…」

『読むと言うよりは自然に流れ込んでくるんだよ』

その言葉に俺は眉間に皺を寄せた。

ユーマ 「お前は俺か…未だにその言葉は理解できないな」

『今に解るさ…っとそろそろ時間のようだな』

ユーマ 「じゃあな、できる事ならもう此処には来ない事を祈って

१५३

俺の言葉に俺の姿をした何かは愉快そうに笑みを浮かべた。

『そうつれない事を言うなよ、一ついい事を教えてやるからさあ』

「何だよいい事って？」

俺と同じ姿をした何かは一層その笑みを深くして口を開いた。

「お前にはもう時間がない……」

「ユーマなに？」

『精々呑まれない様につけるんだなククク』

「それは一体どう言う意味だ！」

その言葉を最後に俺の視界はブラックアウトした。

[illegible]

もう一人のユーマは狂った様に笑い出した。

そう...

狂った様に…

ユーマ 「くっ！」

ゴチン！！！！

俺は勢いよく起き上がると何か硬い物にぶつかった。

クリス 「つう〜！痛いじゃないですか！行き成り起き上がらないで下さいユーマさん！！！」

ユーマ 「つつ！痛いのはこっちだ！いや、それよりも何故お前が俺の部屋にいる？」

俺は額を抑えながら、同じ様に額を抑えているクリスにそう言った。

クリス 「昨日言ってたじゃないですか、魔物の討伐に行く時は俺も連れていってくれって、なのでこうしてユーマさんを呼びに来たんですよ」

ユーマ 「こんな時間にか？」

クリスの言葉に俺は窓から外を見た。

外はまだ日が出ている訳ではなく、やっと青みが掛かっている程度で、部屋に置かれている時計を見ると4時半を少し回った程度だった。

た。

クリス 「だってハヤト様達には内緒なのでしょう？ならまだハヤト様達が寝ている時間帯がよろしいかと思っ たんですが…」

ユーマ 「そうだった…ありがとうクリス」

クリス 「いえ、支度が済みましたら城門前に来て下さい」

クリスは笑みを浮かべてそう言うのと部屋から出て行った。

ユーマ 「さてと、着替えるとするか…」

俺は自分の服に手を掛けて着替えを始めた。

コトン…

俺がズボンを持つとズボンから何かが落ちる音がした。

ユーマ 「いつも肌身離さず持っていてよかったな…」

俺はそう言っ てズボンから落ちた、ナイフ、を拾い上げた。

ユーマ 「あの時、から使う事が無かったこいつをまた使う事になるなんてな…」

俺はそう言っ て部屋を出た…

鬼門^{キモン}

と彫られた二つのナイフをズボンのポケットに仕舞って…

クリス 「あつ！こつちですユーマさん」

城門前まで来るとクリスが手を振って俺を呼んだ。

ユーマ 「……………他の奴らは？」

俺はそう言っただけを見渡したがクリスと俺以外には誰もいなかった。

まさかと思うが、俺とクリスだけで魔物の討伐に行くのだろうか？

クリス 「え？私達だけで魔物の討伐に行くんですけど？」

やっぱりか…

ユーマ 「普通は兵士が誰かがついて来るんじゃないのか？お前は
この国の姫なのだから護衛とかは当たり前だと思っただが…」

俺がそう言っただけクリスは困った様な笑みを浮かべた。

クリス 「普通はそうなんですが此処最近魔物の動きが活発になっ
ていまして、今まで魔物が出現しなかった地域にさえ魔物が出るよ
うになってしまったんです、その所為で私も含めて兵士の皆様は休

む暇も無く魔物の討伐に出かけまして…」

クリスがそこまで言って俺はクリスの言いたい事を理解した。

ユーマ 「つまり今まで働き続けている兵士達に余り負担を掛けたくないから此処は私と二人で行ってくれと？」

クリス 「はい、いつでも心配しなくても大丈夫ですよ？私はかなり強いですからユーマさんを守りながら戦う事なんて朝飯前ですよ」

クリスは笑みを浮かべてそう言った。

ユーマ 「ハア…（疲れているのはクリスも同じだろうに…）」

クリス 「ユーマさん？」

行きなり溜め息をついたユーマをクリスは不思議そうに見た。

ユーマ 「人の事ばかり考えてないで時には自分の事も気遣えよ、お前が倒れたりしたら心配する奴らもいるだろ？」

それに俺はお前に守られる程弱くはない、足手まといにはならないさ…」

クリス 「ユーマさん…解りました」私の背中を任せましたよ？」

俺は頭に乗せている手を離しクリスに向かって拳を突き出した。

ユーマ 「おう、任せておけ！」

俺の言葉にクリスも拳を作り、俺が突き出した拳に自分の拳を当て

た。

クリス 「よろしく願いします」

そうして俺達は魔物討伐の為歩きだした。

ユーマ 「そう言えば何処に向かつてるんだ？」

クリス 「牙獣^{がじゅう}の森と呼ばれている所です、獣類の魔物が多く生息しているのでそう呼ばれる様になったと聞いています」

俺達はまだ静かな街の中を歩きながら話していた。

ユーマ 「ふう〜ん、牙獣の森って言うのは此処から遠いのか？」

クリス 「いえ、そこまで遠くと言う訳ではありません、国から出て道なりに進んで行けば一時間ぐらいで着きます」

ユーマ 「そうか…」

そんな事を話していると大きな鉄格子が見えてきた。

クリス 「此処を抜ければもう命の保障はできません、それでもユーマさんについて来ますか？」

ユーマ 「ああ…覚悟は出来てる！」

俺のその言葉にクリスは頷くと鉄格子の横に設置されているレバーを引いた。

クリスがレバーを引くと鉄格子は重い音をたてて上へと上がった。

クリス 「それでは行きましょうか」

クリスはそう言って歩きだし、俺は無言でクリスの後について行っ
た。

数分後…

晴れ渡った青空に

心地好い風を身体に感じて

俺達は…

クリス 「いや、今日はほんとにいい天気ですね」

ユーマ 「……………」

クリス 「こう言う日は景色が綺麗な所でピクニックでもしたいで
すね」

ユーマ 「……………なあクリス？」

クリス 「はい何ですか」

ユーマ 「現実逃避したい気持ちも解るが取り敢えずこいつらをど
うにかしてくれないか？」

追い掛けてくる魔物達から必死に逃げていた。

クリス 「あんなにいっぱい無理ですよー！！！」

クリスはさっきまでの笑顔から一変涙目になりながらそんなことを言った。

ユーマ 「お前が招いた状況なんだから何とかしてくれ…」

どうしてこんな事になっているのだろうか…

魔物と出会う数分前…

ユーマ 「そう言えば昨日言っていたシンキって一体なんだ？」

俺は昨日クリスが言っていた事を思い出しシンキについて聞いてみた。

クリス 「え〜と、心器と言うのは思いの力が具現化した物です」

ユーマ 「思いの力？」

クリス 「はい、まあ口で言うより見てもらった方がいいですね」

クリスはそう言って右腕を前に出した。

ユーマ 「一体何を…」

クリス 「来たれ我が魂の輝きを・・・聖光を纏う銀剣」ハイラーシルヴァアート！」

クリスがそう言うのとクリスの右手から光りが発し、俺は余りの眩しさに目を瞑ってしまった。

少しして光りが止んだのを気配で察知した俺が目を開けるとクリスの右手には細剣^{レイピア}が握られていた。

ユーマ 「それ…は…？」

クリス 「これが思いの力が具現化した武器…心器です」

ユーマ 「これが…心…器…？」

俺はその余りの美しさに目を奪われていた。

光りを反射して輝く銀の刃に美しい装飾のなされた金色の鍔と柄で出来た剣…

つとその時…

地響きが起こった。

ユーマ 「何だ！？」

クリス 「つつ！これは！？」

そして…

『GYAAAAA！！！！』

地面を突き破ってミミズの様な巨大な化け物が現れた。

ユーマ 「なんだこいつは！？」

クリス 「この魔物は…アースウォーム！？なんて大きさ！？」

体長二五メートルはあろうかというミミズの化け物が叫び声を上げて襲い掛かってきた。

『GYAAAAAAAAAAAA!!!!』

俺達を飲み込もうとしたのか口を開けて突っ込んできたミミズの化け物から、俺とクリスはそれぞれ違う方向に跳んでそれを躲した。

クリス 「ユーマさん！」

ユーマ 「くっ！俺の事はいい！早くこいつを倒すぞ！」

俺がそう言つとクリスは力強く頷いた。

クリス 「はい！」

クリスはそう言つてミミズの化け物に向かって行つた。

ユーマ 「おい！？無闇矢鱈に向かって行く奴…が…？」

クリスが持つている細剣が目映いばかりの光りを発しクリスは化け物の腹部（？）中央位置まで高く跳び上がった。

クリス 「終わりです…刺し穿つ銀閃Ⅱシルヴァシユテンレンケルン…！」

中央位置まで跳んだクリスは化け物目掛けて高速で突きを繰り出した。

いくつもの銀の残像を残すその突きはユーマの目でも捕らえ切れる

ものではなく、容赦無く化け物の中央を吹き飛ばした。

『GYU...?GY...:A...?』

一瞬の出来事にミミズの化け物は何が起きたのか解らないまま絶命した。

俺はその光景をただ茫然と見ている事しか出来なかった。

二十五メートルはあろうかと言うミミズを一瞬で倒してしまったクリスに驚きを隠せないでいるとクリスが近づいてきた。

クリス 「どうでしたか？」

ユーマ 「え？」

クリス 「私がどれだけ強いかわかっていただけましたか？」

俺の脳はまだうまく機能していなかったが俺は何とか口を動かした。

ユーマ 「あ、ああ...まさかお前が此処まで強かったとは思わなかったよ、心器の力も凄まじいものだ」

クリス 「だから言ったじゃないですか、私は強いって」

俺はそんなクリスに苦笑で返して魔物の亡骸を見た。

ユーマ 「（あれが心器...なんて力だ、

あれを手に入れることが出来たら俺はもっと強くなれる）」

つとその時さつきよりも大きな地響きが起こった。

ユーマ 「っ！さっきよりもでかい！今度は何だ！？」

っとその時クリスが申し訳なさそうに口を開いた。

クリス 「あっあの～ユーマさん？」

ユーマ 「っ！何だ？」

俺は揺れる地面からバランスをとるのに忙しくて目だけをクリスの方に向けた。

クリス 「とても言いにくい事なんですけど、今さっき倒した魔物はアースウォームと言いまして…」

ユーマ 「そっそれは今話さなきゃいけない事になったのか？」

揺れに堪えながら俺はクリスにそれが何だとも言つ風に聞いた。

クリス 「え～と、一応聞いて貰えると…多分この揺れに関係がある事なので」

ユーマ 「ならてっ手短に頼むっ！」

クリスは困った様な笑みを浮かべてそう言ったので俺は揺れに堪えながら早く喋るよう促した。

クリス 「アースウォームと言うのは目が退化した変わりに鋭い嗅覚を持っています…」

俺はまだ続いている揺れに堪えながら黙ってクリスの話を聞いていた。

クリス 「仲間がやられると、仲間の血を嗅ぎ付けて戦って消耗している獲物を狙って集まってくるんですよ…」

つとその時、クリスが言い終わると同時に地面が割れてさっきの魔物と同じぐらいの大きさのアースウォームが姿を現した。

『GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!!!!』
『』

ユーマ&クリス
「……………」

その数…

20体以上!

クリス 「ユーマさん、逃げますか…?」

ユーマ 「だな…」

俺とクリスはそのあまりの数に回れ右をし、走り出した。

そして回送は終わる…

『GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!!!!』
『』

ユーマ 「たく、ぎゃあぎゃあぎゃあぎゃあ騒がしい奴らだ…クリ

ス、お前のその心器であいつらを一気に倒せないのか？」

クリス 「だからあんなに一杯無理ですよー！！私の技は全て単体用なんです！」

相変わらず涙目になりながらクリスがそんなことを言った。

ユーマ 「身体力が普通より上と言ってもこのままじゃいつか限界がくるな…」

俺はどうするべきか考えてある決心をした。

ユーマ 「仕方がない…」

クリス 「何かいい案があるんですかユーマさん！」

俺は難しい顔で頷き、その場で足を止めて魔物の群れを睨んだ。

ユーマ 「あるにはあるが…」

クリス 「あるなら何でもいいですから早くやって下さい！」

ユーマ 「解った…その変わり暴走したら頼んだぞ」

クリス 「え？」

俺はそう言つて魔物の群れに向かって行つた。

俺は目を瞑り闇の中に沈んで行く自分を想像し、そして目を開けた。

ユーマ 「直死の魔眼発動…」

アースウォーム達は一斉に地面に潜り俺の視界から消えた。

ユーマ 「……………」

俺は細心の注意を払い、何処から来てもいいように構えた。
すると地響きが起こりそれと同時に俺は後ろに跳んだ。

『『『『 G Y A A A A A A A ! ! ! ! ! 』』』』

ユーマ 「その地響きの所為で簡単に出て来るタイミングが解るな
……」

アースウォーム達は出て来ると同時に口を開け、俺を飲み込もうとするが俺はサイドステップで横に跳び、アースウォームの身体にある線をナイフでなぞった。

また一匹、また一匹と俺はアースウォーム達を肉の塊に変えていく。

ユーマ 「身体能力が上がり、更に鬼の力も発動させてるんだ、お前らの動きなど止まっているに等しい……」

7匹目のアースウォームを倒した所で、アースウォーム達は野生の感で勝てないと理解したのか地面に潜り逃げていった…

クリス side

ユーマ 「解った…その変わり暴走したら頼んだぞ」

クリス 「え？」

そう言つてユーマさんはアースウォームの群れに向かって走つて行つてしまった。

クリス 「ちよつ、ユーマさん！？一体な…に…を…？」

私はユーマさんの自殺行為に等しい行動を止めようと声を上げたその時、ユーマさんの身体からとてつもない程のか殺気が放たれた。

クリス 「この殺気は…ユーマさんが…？、身体に力が入ら…ない」

ユーマさんの殺気を浴びた私はその場に膝をついた。

ユーマさんを見るとズボンから木の板の様な物を二つ出していて、その板から刃が出てきた。

クリス 「あれは…ナイフ？あんな物で…ユーマさんは戦う気なんですか…？」

そう思つた直後、ユーマさんは上に大きく跳んでナイフをアースウォームの身体に突き立て、そのままアースウォームの身体を引き裂いていった。

ユーマさんが地に足をつけると同時にアースウォームの身体はバラバラになり、私はそれをただ茫然と見ている事しか出来ないでいた。

クリス 「そんな事つて…あんなナイフでアースウォームの身体をバラバラにする何て不可能なのに、一体何がどうなつて…」

ユーマさんは次々とアースウォーム達を肉の塊に変えていく。

クリス 「あれがユーマさんの力…え？…何ですかあれは…？」

私はそこである事に気付いた。

クリス 「ユーマさんの瞳が紅い…？」

ユーマさんの瞳が紅く変色している事に。

その瞳を見た瞬間悪寒が背筋を走り、言いようの無い恐怖に襲われた。

クリス 「これはあの時と…」

私の脳裏に初めてハヤト様達と会った日の光景が浮かび上がった。アースウォーム達は勝てないと本能で悟ったのか地面に潜り逃げていき、ユーマさんは不意に方膝を着いて苦しみ出した。

クリス 「ユーマさんの様子がおかしい？つつ！ユーマさん！」

私は恐怖を振り払いユーマさんの下に駆け出した。

クリス side end

ズキン！

ユーマ 「くっ！（やっぱりいつまで経ってもこの痛みはなれないな…）」

俺は片手片膝を地に着けてもう片方の手で片目を抑えた。

クリス 「ユーマさん！大丈夫ですか！」

ユーマ 「大丈夫だ、心配ない」

俺はそう言っただけで立ち上がりクリスを見つめた。

クリス 「……あの、聞いてもいいですか？」

ユーマ 「さっきの異常な力は何か？だろ？」

俺はクリスが聞きたいであろう言葉を先に言っているとクリスは黙って頷いた。

ユーマ 「魔眼を使っただけだよ……」

クリス 「魔眼？」

ユーマ 「少し長くなるから歩きながら説明するよ」

クリス 「はい」

俺とクリスは目的地牙獣の森に向かって歩き出した。

ユーマ 「って魔眼の事についてだが、俺の身体には人とは違う血

が流れてるのは知ってるよな？」

クリス 「はい…」

クリスは少し暗い顔をして返事をした。

ユーマ 「そんな顔するなよ、っでだ俺が今言った魔眼って言うのは鬼の血から生まれた異能力って訳だ」

クリス 「え」と…」

ユーマ 「悪い、説明するの難しいんだ…」

クリス 「いえ、続けてもらえますか？」

ユーマ 「解った…俺はこの魔眼を、直死の魔眼、って呼んでる」

クリス 「直死の魔眼…？」

ユーマ 「そうだ…あらゆるものには発生した瞬間から、予め決まっている崩壊の時期、＜死期＞が内包されている」

クリスはよく解らないと言った表情をしていたが俺は構わず話を続けた。

ユーマ 「俺はその、死、と言う情報を、線、として視る事ができる」

クリス 「死、が…見える？」

俺は立ち止まってクリスを見詰め、口を開いた。

ユーマ 「要するに、あらゆる物を殺せる眼を持っているって事だ」

俺の言葉にクリスは瞳を見開いた。

ユーマ 「この世界にある魔法…魔法的要因も外的要因も無視して対象を殺す事ができる、これが魔眼の力だ」

クリス 「そんな事って…」

クリスはただ呆然と俺を見ている。

俺の言っていることが信じられないと言った風に…

クリスがそうなるのも無理はない、俺だってクリスの立場ならとても信じられる話ではないからな。

ユーマ 「まあ信じられないだろうな、だけど俺が言っている事は本当だ」

クリスはしばらく呆然と俺を見ていたが、今度は真剣な目をして口を開いた。

クリス 「そんな力を使ってユーマさんは大丈夫なんですか？死が見えると言う事は私には理解できません、しかしアースウォーム達が逃げて行った後、苦しそうに目を抑えていました、それってその力を使う際、何らかの副作用があるって事ですよね？」

ユーマ 「まあな、この目を使うと自分の中の狂気が一瞬だが強まるし、目に痛みが襲ってくる、酷い時は何日か眠りっぱなしって言う時もある」

俺の話を聞いたクリスは顔を伏せてしまった。

クリス 「私の所為ですよ…私が安直な考えでユーマさんにアースウォームを倒させてしまったから…」

ユーマ 「気にする事はないさ、あの時は仕方がなかった…っと悪いな、歩きながらって言ったのに止まってしまった」

俺はそう言って歩きだし、それにクリスもつづいた。

クリス 「いえ…あ、もうすぐ牙獣の森に着きますよ」

ユーマ 「了解」

こうして俺達は再度牙獣の森へと向かった。

そして魔物の討伐へ（後書き）

作者「本篇はどうでしたか？

では後の後書きで予告したようにクリスについて説明しますね」

クリス

正式名はクリス・レイ・ウルトウレス・フォルスネイン

フォルスネイン王国第一の姫で、魔物の大量発生で民が困っていると言っ報告を受け、自分自ら魔物の討伐へ出かけるほど正義感が強い。

剣の腕は中々で国でもクリスに勝てる腕前の者はそういない。

自分で編み出した魔法と剣撃の融合技は絶大な威力を誇るが全て単発用なので、一対多数の戦闘を弱点としている。

クリスの容姿は翡翠色の瞳に腰まで届く金髪が特徴。

身長162cm

体重不明（本人いわく内緒だそうです）。

好きな物、もしくは好きな事は

甘い物 可愛い物 散歩等

嫌いな物

辛い食べ物 魔物等

作者「クリスの紹介はこんな所ですかね、次回の投稿ですが他の小説を大幅に改編しようと思っているので、この小説の投稿は遅くなるかもです

いつも投稿が遅い俺ですが頑張っ
て書いてるので暖かい目で見守
ってください！
それでは皆さんまた次回まで〜！
」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5708k/>

4人の勇者と異世界物語

2011年10月10日23時03分発行